女鑑

明治二十八年十一月二十日發刊

第九十八號

東京國光社

女鑑第九拾八號

目録

孝女徵妙



國家に對する婦人の事業

賢良淑婉なる我が姉妹諸孃は、精密なる思想を以て、よく、家政を治むるなり。親切なる愛情を以て、よく、子女を教ふるなり。熱心なる希望を以て、よく、學藝を研くなり。巧妙なる手腕を以て、よく、器物を製るなり。ことに、去年、日清戰爭の起りしより以來は、上、やむことなき方々は申すもかしこし。下、天さかる鄙の老媼たちにいたるまで、殆、擧りて、義に勇み、公に奉じて、或は、軍隊の慰恤に、或は、遺族の保護に、或は、傷病者の看護に、全國、到る處として、みな、君子國の慶象を呈せざるなきを認めたり。吾人、あゝ、我が姉妹諸孃のために感謝して、國家のために、協力せざるべけんや。

從來の形迹において、毎に、國家進歩の範圍外に擲れたる女子の勢力は、戰爭の刺戟によりて、はしなく、社會活動の新なる要素とはなれり。將を斬り、旗を搴り、城を攻め、野に戰ふは、男子の職分にして、また、特性たるも、而も、遠征の軍隊を

して、よく、内顧の憂なからしめ、負傷の將士をして、諸孃が至誠篤實の厚きに感ぜしめたるもの、また、戰捷の一原力たるなきを得んや。然るに、我が邦の女子社會には、一種の悲むべき遺傳性あり。これ、一朝一夕にして改むること能はざるべしと雖、國勢の變動は、知らず識らずの間に、これを革むる傾嚮を有するを見る。而して、賢良淑婉なる姉妹諸孃たるものは、敢て、獨、社會の趨勢にのみ任せず、大に、自進みて、かゝる機會を啓かざるべからざるなり。

然らば、悲むべき遺傳性とは、何ぞ。曰はく、諸孃が、單獨的生活の裡に跼蹐すること、是なり。これ、女性の天質にれいて避くべからざる結果とせんか。然れども、試に思へ。國は、數千萬年來、東海に卓立せる大帝國にして、而して、今、將に、宇内列國の間に濶步せんとする地位に達せり。いやしくも、國民四千萬の半數を占むる諸孃たるもの、纎手、直に、劍を揮はずとも、細腰、殊に、鞍に跨らずとも、從來の單獨的生活をば、漸々に、これを破りて、別に、一條の新路を拓かざるを得ざるなり。

明治の文明は、實に、我が巾幗社會の境遇を變更せり。進步せしめたり。蓋、かの

遺傳性たる單獨的生活を脫して、漸、公共的生活に移りたるは、即、この二十年間に在ればなり。單獨的生活以外、單獨的事業以外、公共的生活、及、公共的事業の存在するを看取し、進みて、これを占領せん冀望を抱き、敎育に、慈善に、產業に、醫術に、文學に、多少、眼識の高き社會には、公共的任務、公共的企業等の觀念を、隱約の間に助長し來りたればなり。女子は、實に、公共的事業の要素、公共的文明の本源たり。而して、天下滔々、人、これを認めず、自身、また、これを遺る。賢良淑婉なる姉妹諸孃、早く、これを反省せずして、可ならんや。

單獨的生活、一轉して、公共的生活と爲る。これ、誠に、我が姉妹諸孃の思想を一變し、愛情を一變し、冀望を一變し、學藝を一變せん至大至重の時機たるなり。單獨の禮儀、單獨の任務、單獨の職業、單獨の快樂、單獨の名譽、單獨の技術、單獨の智覺は、到底、日新の事物と、相伴ひ難きを知り、翕然として、公共の禮儀、公共の任務、公共の職業、公共の快樂、公共の名譽、公共の技術、公共の智覺に嚮へり。二十年來の、我が姉妹諸孃は、實に、一瀉千里の勢を以て、この時機を通過するを見る。則、悲むべき一種の遺傳性は、正に、この際にて、崩解すべき氣運に到

着せるものといふべし。

女性の勢力は、偉大なり。婦人の特性は、神妙なり。決して、區々たる單獨的生活の間に埋沒し居るべきものにあらず。然れども、從來の我が邦女子は、主客の二の原因に拘束せられて、その偉大なる勢力、その神妙なる特性を發揮すること能はざりき。然らば、主客の二の原因、果して、何處にある。請ふ。詳に、これを説かん。その主因とは、他にあらず。我が邦の女子が、自己の勢力、特性を、自覺らざりしを指し、その客因とは、我が邦の男子が、婦人の勢力、特性を利導する識量なかりしを言ふ。自家、これを覺らず。他者、また、これを導かず。その勢力、特性、はた、何を以て、これを開發運用せん。我が邦女子の勢力、特性は、單獨的事業の外に超越せり。さるを、これを束縛して活動せざらしめしは、せざらしめし者の罪なり。而して、又、せざりし者の愚なり。あはれ。

（つゞく）



誠は必ず貫くものなり

玉能舍主人　伊豆雄

人はよし我を何とも石清水、すみ濁るをぞ神や知るらむ」とよみたるは、まことに意味深き歌なり。然れど斯る歌は平安無事にして、世を順境にのみ渡らむ人は、其妙味を知るよしも無けれど、又其を味はふる必要も無きごとくなれども、若も思はぬ災難にかゝりて、あらぬ海士の濡衣などきせられ、世の逆境に陷いり、謂ひ解むよすがも無く、兎やせむ角やせむと、思ひ煩らひ、歎き悲む外無き事なども有るに遭はん人は、自らにも打出られ、味はへずして、其意味の知るる歌なるべし、よりて先此歌の心より解むに、冒頭に人はよしと讀出せるよしは、縦令と云ふ義なれど、此初句は、人はたとひと云ふことゝなるなり。我を何とも岩清水とは、我をいかやうに惡く云はうとも、我はそれには更に構うこと無しと云ふ意を、石清水の神にかけて讀出たるなり。澄にごるをぞ神やしるらんとは、我心のすみてあるか、濁りてあるかは、唯神の明かに知しめす所なれど、我は其神を頼み奉るが故に、神に正して耻るこころの無からんには、人は縦令いかに云うとも、其は云うに任せて置くの外無しと、自ら安心したる意を讀あらはせる歌なり。如何に哀れなる歌にあらずや、然れど心惡しき人、行ひ善からぬ者どもの、世に捨られ罪に陷ることのあるは、彼自ら水に入る者の溺れ、火に趣く者の燒るゝと異ること無くして、自業自得と云ふものなれど、又奇むに足ること無けれど、世の中は測られざるものにて、心も直に、行ひも正しき人の、風としたる間違ひより、疑ひを懸られ、または人の讒言

に遭などして、前に云へる、思はぬ災難に遭ふ者あるは、古も今も其例の尠からぬことなり。然る逆境に陥りたらむ人は、必ず此歌の如く、常に正しき心を養ひおきて、其が爲に動かさるゝこと無く、能く安心して居るべきものなり。それに就ても、凡人たらんものは、少かの過ちは無きこと能はざるべきも、常に天地の神に正して、耻る心無らんことをこそ、勤むべきものなれ。今一首の歌を擧むに、彼源空法師が「さりともと寐ても寤ても賴む哉、おろかなる身を神にまかせて」と讀るも、亦同じ心の歌としるべし。斯く神に任せてだに有らむには。早き晩きの差はありて、在世中に晴るか、死て後に解るか、其は定め難きも、眞は眞、僞は僞、善は善き、惡きは惡きと定まりて居るものにて、蔽はれ果べくも有らねど、いかに隱れたらんことにもあれ、遂に事實の顯はれざるはあること無し。其は何に依りて然るかと云はんか、彼すみ濁るを知看し分る尊き神の坐ませばなり。あはれ賴みある世の中ならずや。それに就て、爰に其證とも見るべき、一の話こそあれ。其は天明三年と云ふ年の頃の事なりとか、此東京の大江戸と稱へて、德川幕府の全盛なりし時、或大名の定府の士に、浮橋賴母、淸島丹三郎とて、竹馬の友にて、兄弟よりも親しく、水魚の交はりをなして。然も同役勤むる二人のありけり、其丹三郎には、先に妻ありしが。不幸にしてみまかり。今は獨身となりてあり、賴母には阿石とて器量殊に勝れたる妻と、辰之助と云へる五歲になる悴一人あり、或時丹三郎用向有りて來りしに。賴母留守なれど平素心易きに任せ、歸るを待て居たりしが、折しも五月のころとて。俄の夕立降來り、大雷天地を轟かして、鳴はためき出しけるに。此丹三郎甚しき雷きらひにて、鳴出せばいつも押入に逃込み、夢中同前になること常なりしが、此時も覺えず賴母が内の押入に這込み、前後も知らず伏

居たりとぞ、時に頼母が妻の阿石は、用足の爲め外に出居たりけるが、是も同じく殊の外の雷嫌ひにて、前後も知らず走歸りて、何時もの如く、押入に這入り夢中になりて伏居たりしが、暫くありて、雷も鳴止む頃、頼母が歸り來りて、下女に雨戸など明さす物音に驚き、二人ともに初めて正氣付、誰やらん今一人這入て居るよと互ひに貌を見合せて、此は丹三郎殿かと心付、丹三郎も扨はれ内義なるかと心付たるに就ても、實に間のわるきことにて、如何はせんと思へども、今更に致し方無く、去り迚出ずに居るべくも有ねど、二人ともに露とこたへて消なましものをとでも、云ふべき躰にて、是非無く丹三郎まづ押入より這出來りて、頼母殿歸られたるか、例の嫌ひ故に前後も覺えず、押入を借申したりと云ひ畢らぬ内に、阿石もまた跡より出て、丹三郎に向ひ、御身の這入てれはす事夢にも知らず、只雷の恐ろしさにかけ込しが、圖らずも一の押入に、二人が這入りて居たるとは、實に申譯の立ぬ事なりと云へど、頼母いつに無き不興顏にて、丹三郎殿も丹三郎殿なり、侍たる者の、いかに嫌ひなれどとて、此は有まじき事なり、阿石も亦阿石なり人の押入に這入り居るを知らぬとは、餘りなる怖がり樣なりとて、更に心開けぬ躰なれど、兩人ともに消も入りたき風情なりしが、暫く有りて丹三郎いかにも貴殿の御疑ひ尤も至極なり、存もよらぬ事なれども　此上は御疑ひの爲に不義ものと認められ、御手に掛られても是非なきことなり、然りながら我等が心底も、貴殿常々能く御存の事なり、阿石殿の操正しきことは、今更云ふまでも無きに、我等故にあらぬ疑ひを受らるゝ事となりしは、實に此上の氣の毒なし、天地神明も照覽あれ、互ひに潔白成心底は、自然に知れ申すべし、必ず〱疑ひ給ふべからずと云ひて、其日は自分の用向一通りを咄し、暇を告て歸りけるが、つく〲考ふるに、今迄

賴母とは、水魚のごとく交はりしに、いかにも不慮の難出來りて、よし無きことに面目を失ひ、行ても間のわるきは云ふまでも無れど、さりとて此儘にて遠ざかりなむ、彌疑はるべし、我は不通するまでのことなれども、阿石ひとりの迷惑とならんこと、いかにも氣の毒なれど、今までの通り押て出入するに如じ、其内には兩人が曇り無き心のほどもあらはれ、賴母が疑ひも晴ぬべしと、其後は猶しげ／＼行て常の通りに交はりけれど、始めの間は賴母何となく、奥齒に物の挾まりたる如き風情にて、打解ぬことのみ多かりしが、元來風とした る間違より起りし、無實の疑ひに過ざれど、其後賴母密に心を付て、種々にためし試みれども、更に怪むべき節無れど、終には心解て、又舊の如く水魚の交はりとはなりぬ。斯くて其年も暮て、翌年七月下旬の事なりとか、阿石の留守なる折しも、丹三郎行たりけれど、賴母大に歡び今日は内の者皆留守にて、淋しき所なり、能く來給ひたりとて、二人共に坐敷に寐轉て咄し居けるに、晩景に及び賴母先行水して入り來り、扨々今日は暑き日なりしが、汗を流していと心地よし。貴殿も湯を浴給はぬやと云へど、丹三郎もそれは忝しとて、行水しけるに、折ふし家老木村某方より、賴母を呼びに來りければ、賴母聞て其は云々の用事なるべし、早歸り來れど孰れも留守のことゆゑ、幸ひ丹三郎殿暫く留守して給はるべし、つい行て來るなり、浴衣は爰に置ぞと、我着たりし格子縞の浴衣を脱て、帷子を着んとせしが、扨々妻が居ぬに、着替を出すも面倒なり、貴殿の帷子を一寸借て行ぞと。心安きに任せ、丹三郎が帷子を引かけて、いそがはしく出行けり、跡にて丹三郎は湯を浴び終りて、彼浴衣を着し、南受なる坐敷に涼みつゝ待居りしが、賴母が歸りは遲く、夕風は涼しく、坐に眠りを催しけるに、晝寐轉びし時の枕も、側にあるを引よせ、とろ／＼と眠り

けるが、早暮〳〵になりて、蚊の顔に來ることの惱さに、團扇をもて顔を覆ひしまゝ、前後も知らず寐入りたる所へ、斯くとは知らぬ、妻の阿石は歸り來りて、其儘下女に湯を取せて沐浴し、自分も浴衣を着て、おお暑かりしと云ひつゝ坐敷へ出見れど、早夕暮のほの暗きに、夫は浴衣のまゝにて甚能く寐入りたるにぞ、丹三郎とは夢にも知らず、其側に涼みて居けるが、是もしきりに眠りを催しければ、其儘其所に寐轉びて、同く一寐入たるは、知らぬ事とは云ひながら、一度ならず二度までも、身にふりかゝる災難の、遁れぬ種とぞなりにける、此日は悴辰之助には、下男七助を付て、外へ遊びに遣り置ありしが、日の暮て後歸り來り、子供心に母の見たさ、先下女に母様はもうお歸りかと云ひさま坐敷へ行けるが、此体を見て愕然し、やお母様とれぢ様とが、一つ所に寐てお居でると、大な聲して云ひ、下女も行灯を持ながら、肝をつぶして出くる物音に、兩人目さめて顔見合せ、何と云ふべき詞も無く、其儘其所を飛出て、裏の切戸より立去り、行方知れずなり果しは、不慮の災難とは云ひながら、いたはしかりけることどもなり、斯くて子供は聲を限りに、母さまよと叫びて泣出せど、下女も惶急てゝ兎やせん、角やせんと狼狽へる折しも、賴母は歸り來りて、之を聞き大ひに怒り、惡き二人が擧動かな、已れ遁して置ものかと、直ちに追手をかけつれども、最早行衛も知れず、せんすべ無れど、いかゞはせんと思へども、其儘に捨置べきにあらねど、翌朝家老木村某まで其由を屆出、內願して申しけるやう、武士の身として我妻を奪はれたりとありては、既に世間に對する面目無し。主君に仕ふる身として、私事の爲に身を捨るは、不忠の極には候へども、去りとて之をも默して、腰拔ものとなり果ては、是亦主君をも耻しめ奉る譯なれど、掛る災難脫れ難し、此上は是非に及ぞず、御暇を給は

り、何處までも二人を探出して、討果し申したしと、委細に願ひ出ければ、木村某聞届け、其由主人に言上せしに、主人は至て發明なる人にて、木村に申し聞けらる丶やう、「頼母が願ひ一應は尤なるやうなれども、元來其兩人の如きは、全く畜生同前の者なり、畜生を討たればとて、何の手柄にもならぬことなり、武士道の立とた丶ぬとは、戰場に於ての剛臆にあり、一人の女如きに迷ひて騷ぐは大丈夫たるもの丶爲ざる所なり、只捨置て奉公すべしとの、頗る寛大の命なりければ、頼母も安堵して、先事故なくをさまりぬ、（未完）

編者云ふ、爰にて頼母が身上のみは、安堵して先こと故無くをさまりぬと云へば、一段落つきたる如くなれども、彼再度の災難迚も云ひ解くべき由無きを悟りて、忽ち其塲を立去り、行方知れず身を隱したる、丹三郎と阿石の二人は、如何身を處したるか、又如何なる局を結びたるかを明らかにするは、此話の眼目なれども、餘りに冗長に失するの嫌あるを以て、あとは次號に讓りたれば、讀者其出るを待て、之を詳にせられんことを希ふところなり。』

女子教育一班（七）

三輪田眞佐子

斯くばかりしも女子の德育は必要なればにや、わが國には既にちはやふる神代より、今日に至るまで、女子の教育としいへば、女德を主とすめり。勿論上古は文字もなく、學校もなければ、教育といふ語を用ゐるときは、あな訝しと思ふ人もあるべかめれど、教育はあながち學校に於てせざるも、その目的を遂ることは難からざるべし、故におのれはわが上古の女子德育を以て、「家庭の良風若しくは、社會全躰の信向によりて、その方針を定めしものと思ふなり。例之ば神代なる陰陽

二神が配偶し給ひけるとき、陰神の陽神に先きだち給ひしを、不吉となし給ひ、改めて陰神が陽神に從ひけれど、めでたかりけりとなんいひ傳ふ、こは婚姻の一事なれど、以て柔よく剛に從ふ大綱定まり、一切の女德これに準ずる源となりけり、といふを得べし。思ふに創國時代の風俗習慣は、末世に影響すること頗る大なるものなり。されば我國の女子は、これを仰奉し、以て典となし、おのづから良順の風習をなすに至りしものならんかし。あはれこの蜻蛉洲なる女子固有の美德は、一朝一夕に始まりしにはあらざるべし。

實にかゝる良風を仰ぎ、これを一般女子の典とすれどころ、千代万世の后に至れども、外國の女風に秀づるなれ。さるものなればにや、人の代に至りても、日本武尊が景行天皇の勅を奉じて、東夷を征伐し給ひしとき、相摸より安房に渡り給はんとせしに、風吹きて浪あれにければ、その后なる橘姫『さねさし、さがむの小野に、もゆる火の、ほなかに立て、とひし君はも。』との御歌をよませられ忽、海に身を投げさせ給ひて、浪をば鎭めんと御心深く入れさせたまひけり。實に尊き御情なるかな、この御歌の意味は、去しころ相武の國の邊に在ませしとき、火の災にあひ給ひし折だに、妾のことを忘れさせ給はぬ、御情深き君ゆゑ、今この身を海にうち投げて、君を救ひ奉らんとなり、とおもふに斯るめでたき先例は、後世の女子が雲井に聳ゆるばかりなる石づくりの女學校にありて、和漢の女書は更なり、西洋の女敎万巻を授かるより、幾くか女子の心を刺擊すること、多からんかし。されば我國女子の、文字なきころより、德育のよすがありしこと、怪むに足らず。

以上の如き、美談積りて、我女子の鑑るべき、一種の經典となりをるのみならず、我國境畫然人種單純なるをもて、他國のあるは朝に移住し、あるは夕に漂泊

して、遂にかしこの山の端に、こゝなる海の邊に、一定の居を占しものと、大に異なり、自然殘忍浮薄の氣なくして、温厚信實の風あるなり。彼の國の、古史を見るに、女子を家畜あるは、物品視ゐたる惡むべき時代あれど、我國史には絶えて、かゝる惡風見えざれど、女子も自暴自棄の境界に居るをもひはせで、天眞を養ひたりけん、いまだ文章なきときは更なり、文字なきときすら、早く歌は女子も、男子の如く讀み、各々その美德を琢く種とせり。古事記等に多く見ゆる女子の歌は、男子に對する感情を述べたるものゝみなれど、大底は神ながら貞操深愛の情を述べしなるべし、おのれは恒に敎育の方便は種々あらんも、天然に感化さるるを最もよしと信ずるなり。

上古にも文字ありしといふものあれど、恐らく一種の象形文字ぐかりはありけんも、現今の文字のやう便利なるものにはあらざりけりと思ふ、從ひて種々の説はあれど定かに文章の世に行はれしは、天智天皇の御代前後の祝詞躰より始りたりけん。されどいまだこれを以て敎育の方便に用ゐしものにはあらざるべし、故にこの頃までの女子敎育は、讀書の方法によりて、唯我がよき島の善良なる國風に基き、老者は少者を敎へ、先進者は後進者を戒しめ、互に心を以て心に傳へ、知らず識らず、良妻賢母となりしものところいふべけれ。その眞の讀書の便により、女訓をうけしは、崇神天皇の御宇、漢字の傳來後なるべし。蓋し紫式部日記に見ゆる如く、中古の女子は假名を能くするに至り、自然漢籍を讀み、且つ書くことを忌みけんも、その昔は上流の婦女は男子の如く、詩を賦し漢文を作りしことは、大日本史を繙き、光明皇后がうるはしく文を屬り給ひしことを見ても明けし。續日本紀にも、嵯峨天皇の皇女有智子内親王が史に通じさせ、詩さへ能くし給ひしことをしるせり、枕草子に清少納言が、大

進生昌の門いと挾きからそのよしを問ひけるに、生昌わらひて家のほど身のほどにあはせて侍るなり、といひけるにつけ、前漢書なるふみにある于公の故事によせて、いひけらく、されど門のかぎりをたかくつくりける人もきこゆるは、その實踐躬行はともかく、漢學に通ずることは、推しはかり得べし。亦紫式部日記に見ゆるごとく、式部は幼きとき、兄惟規の側にありて、その史記を讀むを聞きなどせしが、後ち一條天皇の皇后に、白氏文集を敎へ奉りたりとぞ。

いそひゝく
あかつきしほの
おちあひに
おりたちかねて
なくちどりかな
（水屋集）



孝女微妙

鹽井ふく子

人の子となりては、おのづから、親につかふるといふ事は、知るべきものなるを、如何なれどにや、孝子といはるゝ者は、ことに稀なり。今此處に、しるさむとする、微妙と云ふは、此まれなるが中にも、稀なる孝女なりけり。源頼家が、或日、比企能員が家にて、酒宴のことありけるが、やゝ酣なればしきころ、能員頼家に向ひて云ひけるやう、此ごろ此鎌倉に參りて候ものにて、微妙と申す舞姫の候が、容姿も美くして、舞も殊の外に上手にて、かの祇王、佛といひけるにも、をさ〳〵、おとるまじきとの事、根ざしもさのみいや

しからぬものゝよしに候へば、今宵あたらしき御慰みにもとおぼして、召しよせてこそ候ひたれ、あはれ御前苦しからずおぼされ候はば、呼び出でゝ一手まはさすべく候、いかにおぼしめし給ふぞとありけるに、頼家もいたくよろこびて、そは興ある事かな、何の苦しかるべき、よき肴なり、とく〳〵呼び出でゝ、何なりとも一曲唄ひ舞はさせよ、疾く〳〵とありしかば、さらばとて、直に呼び出でしに、誠に聞しより思ひしより、一際たちまさりて、たゞ見る月か花か、袖も面も匂ひこぼるゝばかりにて、わきて芙容の眼のすゞしさは、玉の露したゝるばかりにて、らうたさいはむかたもなし。何にてもあれ、とくと仰せらるゝに、いとしとやかに謹みかしこみ、はるか席をひきさがりて、今様おもしろく舞ひすましたる、かざせば紅の花の袖に散り、まねけば緑の柳の手によられ、ひるがへれば春鳥の花にうつり、亂るれば蝴蝶の野邊に遊ぶがごとく、姿といひ、聲といひ、節といひ、えならぬうつくしさに、頼家公をはじめ、一坐の人、杯の手も忘れて、しばしうちはやしたりとぞ。さて頼家公、ひたすらに感じ賞せられて、何をがなひきでものをとの給ふに、能員申すやう、實はこの舞姬は、もと、都のものなるが、いかなることか、君に見え奉りて、私に申し請はむことの、止み難き事の候て、はる〳〵と都を立ちて、この鎌倉に亘りこし候ものゝよしに候へば、御引出物たまはらむれうに、彼がねがふよしを聞せ給はらば、少女がよろこびは申すべくもあらず、小生までも、かたじけなき面目に覺え候。いかで聞かせたまへと云ひけるに、さらば其よし聞かむ、何事ぞ、はる〳〵とたのみ來つるからは、よく〳〵仔細あることならむ、都にはその方が、力とも頼むべき人なかりしか、ふびむのものや、とく語れ、此の世の中の事ならば、力になりねさせむといへば。微妙は何にむせびてか、しばらく

は、ものもえいはず、たゞかしこまりて、ひた泣きに舞の袂を志ぼりけるが、やうやくに涙をせきとめ、さて申しけるやう、今はむかし、建久年中、我父なる兵衛尉爲成と申すもの、人の讒言にかゝり侍りて、圖らざる罪人となり、蝦夷とやらむいふ處に、流され侍りぬ、其時、妾は年僅に七歳ばかりのほどに侍りて、蝦夷は何地なりとも知らざりしが、母なる人のかなしみいふばかりなく、父の事をのみ、あけ暮に嘆きなけかれはては、心も身も嘆き尽くしたまひて、秋の木の葉の遂に留らずなりはて給ひし悲しさ、父にはわかれ、母をも失ひ、便るべき親戚も、たえてなき身と成り侍りて、我身は一人に父の戀しく、母のなつかしく、やうやう人となる今日までも、え忘れぬは、おぼろげなる父の面影と、またかへすよしなき母の御歎き、如何にもして一度は父を尋ねてむ、さて母なるが草葉の影の、み心をも慰めてむとおもへど、かひなき女子の身の悲しさ、父の安否よそながら聞くべきよすがだに得ず、たゞ〳〵蝦夷とやらむは、北のはてときゝ侍るのみに、雁のゆき歸りの春秋、天雲のよそにあこがれくらすのみにて、せむすべとても侍らず、今はたゞ君にま見え奉り、切に歎き聞えもせば、君がなさけに、さても父に逢ふべきよすがあらむと、おもひたどりて、淺ましき、口惜しき、かゝる賤しき姿に成り侍り、耻づかはしくも、かうは推參致し侍りぬ。一重に御仁心をたれ給ひて、父に逢はさせ玉へとて、泣き入りしに、賴家公も、すゞろにあはれと思ぼして、よそながら袂をしぼり玉へば、ありとある人々、皆我身にあらぬ涙にむせばぬはなかりけり。げに、こゝろも、姿も、うつくしき少女、眞の美人とは、かゝる人をや云ふべからむ。賴家公の母なる政子御前、この事を聞かせ玉ひ、いとゞあはれに思ばされ、やがて其人のありといふ陸奥に、人をはしらせて、安否を親しくとはせ給ひぬ。

徵妙は、一日も千代の思ひにて、今日は御使歸らむ、明日は父上の伴はれ歸られむなど、ひねもす物も食べず、よもすがらいねもせず、空にあこがれ亘りぬるこころのうちは如何に苦しかりけむ。さるに、かばかり孝女が、待ちに待ち、こがれに焦れたる赤心も、空しく、使歸りて、其人はゝや果敢なくなりたりと告ぐ。あはれ樹靜ならむと欲すれども風止まず、子養はむと欲すれども親またずといひけむ、孝女がこゝろのうち、おもひやるだにあはれなり。徵妙はしばらくは、物もいはず、衣ひきかつぎて、絶え入りけるが、やゝありて、首をもたげて、涙に曇る聲細く、そは誠にてか、夢にはあらずや、更に現とは覺えられず、月見るごとに、花見る度に、戀しくも、なつかしくも、え忘られぬ母人に、今までもおくれ、骨身砕きて、今日までもながらへてうきめを見しも、ひとへに父に逢はむとのみ、思ひなぐさめ過ごしてしものを、夢なるか、現なるか、夢ならば覺めよ、さめぬは現なるか、悲しや、たま〲此の世に、親子となりて生れ出でけるに、その父子が、生きて諸共に居り、相養ふ事あたはず、父の病にかゝるも、子として撫づることだに能はず、父死して棺によることも叶はずとは、如何なる不孝、不幸の身ぞ。如何なる深き罪ありて、かばかりにかなしき事を、身一つにはうけゝむ。母を憂ひに失ひ、父をもまた、一日もさすらずして、蝦夷のはての人となしはつるとは。悲しや、あさましや、かゝる不孝の子となりて、如何で此の世に殘りて、何の甲斐あらむ。今は人生に何の思ひかゝらむやとて、むざむや、みどりの黑髮を剃り落し、花の衣をぬぎすてゝ、浮世のちりも、今日を限りに、父母の菩提をこそ拂はめとて、名をも持蓮と呼びなして、ひとへにこゝろを、法の道にすましたりといふ。政子御前も、いとほしがられて、家をもあたへ、さま〲にめぐまれけるとなん。げに

あはれの事や。さらぬだに拙き筆、涙にまぶりて、れもふやうならず、大かたの姫たち、微妙が心をくみ給ひて、涙ならで此文に、をしみたまふなかれ。

小田井海仙の妻

山川清素

一度筆ををどらすれば、龍蛇忽に紙底よりわきいづるが如く、一旦墨をみなぎらせば、千里の山水寸紙の内に浮びくるが如し、全盛赫々の應擧を足下に見て、英名嘖々の呉春を脚底に爲し、嶄然として頭角を現したるは海仙其の人にあらずや其の書き出す一片の書幅は古雅幽遠にして、一見愛すべく、慕ふべく、人をして、飽くよしなからしむるは、實に海仙その人の狀貌さへ浮び出づる心地ぞせらるあはれ此の優閑風流なる繪師の名諸孃の内には知り玉ふもあらめど、其の人の此に至りたるは全く妻の内助によりしことを知り給ふは稀なるべし。

山陽海仙と京都に相見て、夙にその有爲の才筆なるを觀破し、之に說きて言はく、方今京都の畫家應擧呉春に至りて、其の致極れりとなすあはれ足下をして從來なしゝ所を爲さしめば此の二家を壓倒して、別に其の上に踞せむこと難き業にもあらざるべし、按ふに畫道も亦文道と同じからむ、二家の外別に其の軸を出す所なしとせむ、足下如何なればこれをおもひ給はざると、炯々たる山陽の眼光遂に彼の手腕を撞破して、奮然興起せしむるに至りぬ、諸孃は海仙の席を捲きて起ち、斯く一家の見を開きたるは山陽の力あづかりて功ありしことは知り給ふらめど、其の人のこゝに至りたるは妻の助力も少なからざりしこと知り給ふは稀なるべし。

夫は英名一世を覆ふばかりなるにも關らず妻は糟糠と共に庖厨に隱れて知る人少く、男子は聲榮日月と光を爭ふばかりなるにも關らず、女子は閨門の裏に日蔭の

身となりて果つる者、古來幾何なりけむ、婦人なりとて同じくこの世に生れたるもの如何なれど斯の如き差異をか生じたる、固より女子は內にありて男子を助くるもの、男子に先ちて一世にたゞろかむとするは其の好める所にはあらざめれど、濁りなきかゞみの池の鴛鴦の姿一は全く、一は欠くることのいかで道理なるべき。

海仙有爲の才をいだきながら、あたら貴き月日をあだに過したりしは故なきにあらず、一家を成すべき筆を持ちながら、振ふべき境に至らざりしは全く其の資財の無かりしによれるなり、海仙をして、學ぶに資あり、習ふに財あらしめたらむか、山陽の助言は待たざりしならむ、後安く紛骨砕身の苦をもなめしならむ、業をなさむの心は念々につのるといへども、如何せむ日夕を支ふるもおぼつかなき哀しき境界、加ふるに妻孥の纏綿するあり、西に動かむとするも、東に向はむとするも、身は我が身にして、我が身の用を爲さゞりしなり。

牝鷄の晨に鳴くを以て不祥といへど、默して言はざらむは言ひて勵すには若かざらむ、人の妻となりて良人に內顧の心あらしむるは、不貞之に增すものあらじ、女子の身のかひなしとはいへ、兎にも角にも內を守りて、良人の素志を貫かしめむ、良人の腰下にまとひつきて、其の力を賴むぞかりが、女子の習かは、日頃たしなみ給ふ繪の道其も、筆だに執る暇なく、朝夕の家計にれはるゝ良人の身いかぞかり吾が身をふがひなしとや怒り給はむ、いで女の身とて一人二人の身を養ふ程の烟立てかぬる、道理はあるまじ、さなりかりにも良人をそこのまゝにはくちさせじ。其の志す所に行かめでは止まじ、吾は潮やく海士のうきめかる身となりしづむとも、雨ろぼつ田の面のろはぞとくちはてつしとも、良人だに快よく受け引き給ひて、道に就き給はゞ

吾は固より期する所、何をか厭はむ。何をか避けむ。さなり。このよし聞え上げむ。言ひ試みむと獨りうなづき、一日良人に向ひて、妾は今まで心なくも御身にまとひて、御身を力に貧の中にも嬉しく暮し來つるを、さりとて、これが爲に日頃御身のたしめる道をも此の頃は殆忘れさせむとしつ。思へば妾の罪誠に深かり。如何にも妾は心なかりし。行末望み多き、貴き御身、御身は決して斯かる所に朽ち果てさすべき、御身にはあらじ、今より志す所に至り給ひて、必一角の家を興し玉へ。吾が家のことは萬事吾に任せ給へ。御身の名をけがし、家をおとすなどは夢にも心に掛け玉ふな。如何に女子の身なればとて、一家を過ぐすばかりは心安かりいで翌日は御門出の心構へし侍りなむ。何事も。夢、御心置はし給ひろ。業なるまでは決して家むし顧み給ひそ。妾は五年にもあれ。十年にもあれ。御身の業のならむまでは、悦びて待ち侍りなむ、夢々御心遅れし給ひて、身の行末をあやまり給ひそといひいでたる妻の言の葉、日ごろよりさかしとは思ひ居たる妻の言にはあれど、意外に出でたる此の一言、海仙の驚きは果して如何なりけむ。海仙の悦び又果して如何なりけむ。海仙は妻の一言にろゞろ心勇みて、其は元より年來吾が望む所、汝さる心ならむには吾いかでかたゆたふべき。例ひ吾が身期する所にまでは至らざれ。必人後を出でゝ、汝の言葉に報ひむ事を心にかけむ。汝吾の歸らむまでは、心ぼろくとも、一家はよきに賄ひてよと家事をゆだねて彼は飄然家を立ち去りぬ流石に別るゝことの哀しくて、くづるゝばかりの柴の戶、見歸れば妻は御身の錦着てくゞり給はむ日は此の柴の戶口も、いかばかり嬉しからむといひまぎらして見送りぬ。

海仙鎮西を流浪すること、前後七年、或ときは道に饑ゑつかれて田家の媼に一飯の憐を乞ひしこともありけ

む。或時は夜を行きわかして草の枕に暫時の夢を買ひしこともありけむ。されど吾が身を立つるは全く妻の爲と思へど、如何なる苦難も如何なる困憊も中々に心慰まれ、氣勇まれて、握りたる筆の柄は露ゆるべす、染め出す墨の色は聊もたかへざりき去れど年經るまゝに其の業は驚くばかりに優れ行きて、終には弁ぶものもなき上手となりて、海仙の名は鎭西一圓をとゞろかすのみにはあらずなりぬ。

この程に家なる妻は或時は苧をうみ、糸をくり、或時は人の爲に衣をぬひ、織を織り、髮はおどろと亂れても、容顏は常に生々として、行末を望みて笑めるが如く、身にはつゞれをまとへども、風姿は常に活々として、前途を思ひて、喜ぶがごとし。營々として晝はひねもす、立ち働けど晝げの烟のたえしをつぶやく心づかひもなく、齷齪として夜はよもすがら、いも寢ざれは、寢衣の薄きをかこつられひもあらじ。世の人の狂せる花衣はよろにして行末來べき春のたのしみをおもひ、蓬か本の月のかげは、見向きもせずして來む世の秋のなつかしさをたのみて、三年の花の開落を過し五年の月の盈虧をへて、家のくらしもやうやう圓になりゆくと共に、たえて久しき良人の身に恙もあらで、めぐりあふ日も近うなりぬ、いたづきつくして得たる貲財、今は餘るばかりにもなりたれど、家も見苦しからずとり繕ひ、庭の雜草はかりはらひて、今は良人を待つのみのやすき身とはなりぬ。聞けは良人は期したる如く、一家を立て其の堂奥に登り玉ひて、人のおぼえも世の常ならじとか。斯るべしとはおもひたるものゝかりにも女と生れては、吾が夫の如き良人をこそ撰ぶべけれなど其の身は幾年月獨空閨を守りて、憂しともおもはず浮世の波にゆられし苦も知らぬげに、昨日と暮し、今日と明すほどに七年を過ぎし秋の夕つ方、海仙は契りし如く、紅葉の錦を身にまとひて、ゆくりな

くも昔のまゝの柴の戸をくゞりて歸り來りぬ。むかしながらの家居の、何となくゆかしさのそひたるは、うれしさあまりにやと疑へど、ふすま障子のそろひたるは、全く妻の心やりなめり。庭の木立は昔のまゝに繁り合へど、植ゑおきし梅の一本、ことに趣のおくよしなきは吾が眼の肥えたるのみにはあらじ。さてもいみじうぞ守りくれたる。汝の操なくばこの梅の一枝もいかで吾に見映あるべき。これも單に汝の心の一すぢぞといへば妻はうちけして誠この梅の一本、君の片身とおもへばこそ心して朝夕を守りつれ。妾は初より君の風彩今まのあたり見る此の一枝のごとく、幽粋閑雅たとしへなきを知りたればこそなどかたみにかたりいだし、いひかはす風情縮師の妻にはいかにもふさはしきものと見らる。此の樂しけなる年月の語らひ、軒端の鳥聲を立てゝ吹きいるゝ風もねたみやすらむ。夫婦の大道は猶天地の理の如し。夫の婦を助くるは天の地を覆ふが如く、婦の夫を保つは地の天を載するが如し。天ありて地なきを得ず。夫ありて婦なきを得ず。即夫のいさをしはやがて婦のいさをしなるべく婦の事業はやがて夫の事業たるに外ならじ。されど地にして天を覆ふ道理なきが如く婦にして夫を後にする道理はあらじ。婦はいつまでも夫の後にゆくべきもの、良人功名の金鍊を得れば婦たる務は足りぬべし。良人榮譽の桂冠を翳さば、婦たる任は終りぬべし。況や宇宙の美を探りて其の眞髓を捕へたる人の妻に於てをや。又何をか望み、何をか願はむ。世にきこえむ、人に求めむなどはさらさら其の本意にはあらざれど、其の傳埋もれて世に知られず成り行かむことも本意なくて一言添へて諸孃たちにまで。





活花（九）

田邊和氣子

野にも山にも菊より外の花こそなけれ、されど菊はまた活たるはあでなるものから、前號に菊七本の活かたに、其あらましをかゝげたれど、玉くしげ二度菊をものせむも、老のくりごとゝつぶやき給ふ君達もあらむと、けふはめづらしく二重切の竹筒にそなれと菊を活給へかし、そなれど四季ともにかはらぬ色のものなれど、折にふれての取合せに用ゆ、そも二重



切の活かたは、上なるは眞副にして垂ものを用ひ、下には立て生ずるものを用ゆ、上の眞副にあしらひはよき程に添へてよし、躰は下にありといへどもなほ心ぞ

かりのかたちを見せ、下なる体の活かたは体をかりなるものから、心をかりに眞副体のかたちを見せて活るをよしとす、上には五本、又は七本花筒の大小により活てよし、下も同しく見計ひ圖の如くすべし。

すべて二重切の上には藤、山吹、卯花、萩など活る習ひなり、下には何花も立て生ずるを用ゆ。

たちぬひ

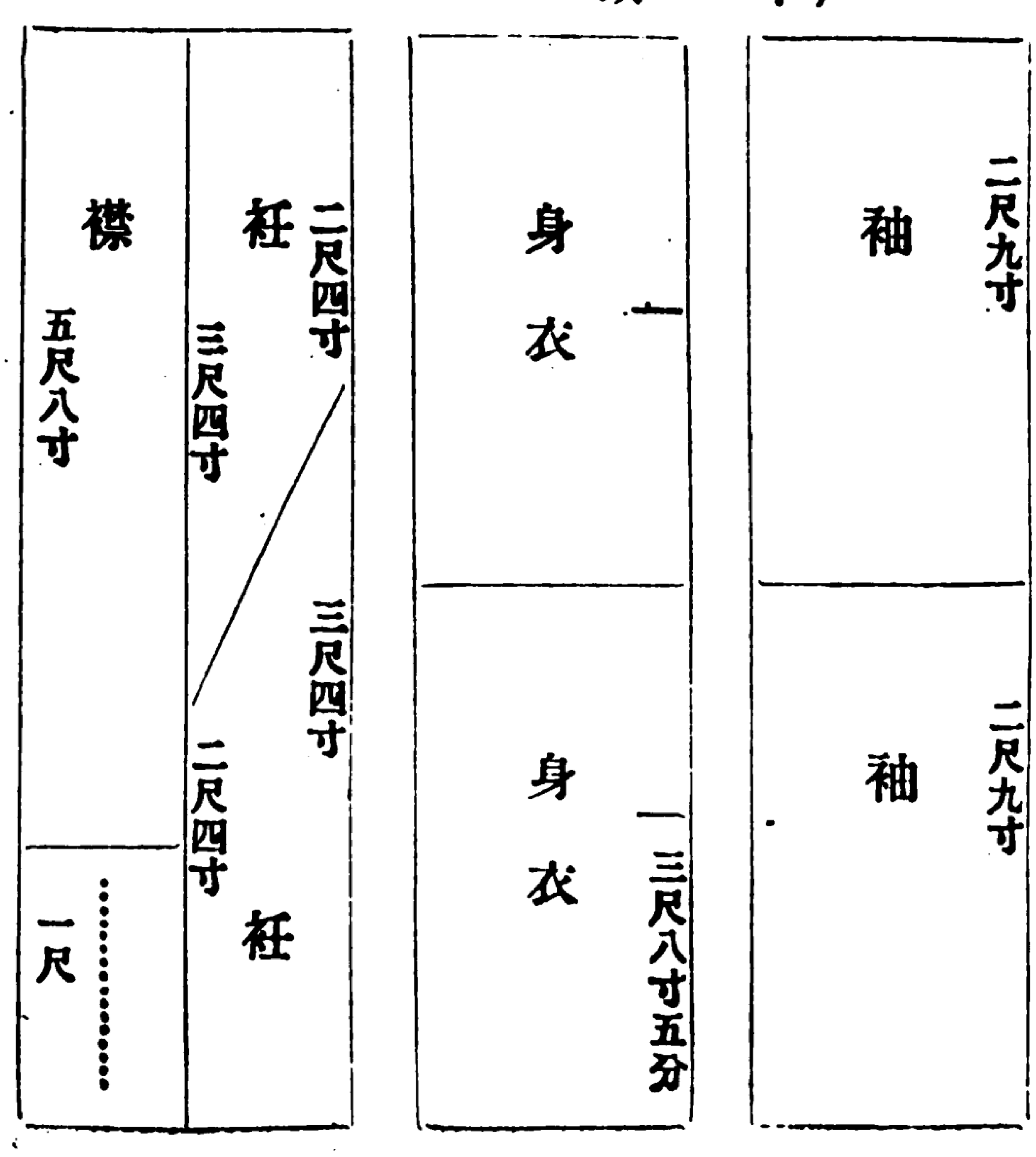
西山たい子

（十三）本裁のたち方

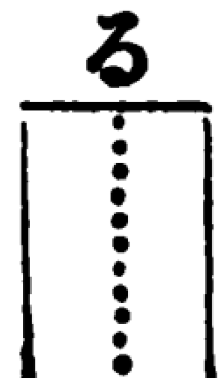
本裁は、一反みなにて裁つものなり。

まづ、例の如くに、袖をとり、殘りの切れを、五つ半に折りて、その四つ分を、身衣となし、殘り一つ半を縦に二つに眞直に切り一方を襟となし、一方を衽とするなり。

（本裁の圖）



圖の如くして、一筋違ひに裁つをかぎ衽と云ふ。また衽をばうになさんと思はゞ、襟さきに殘りたる



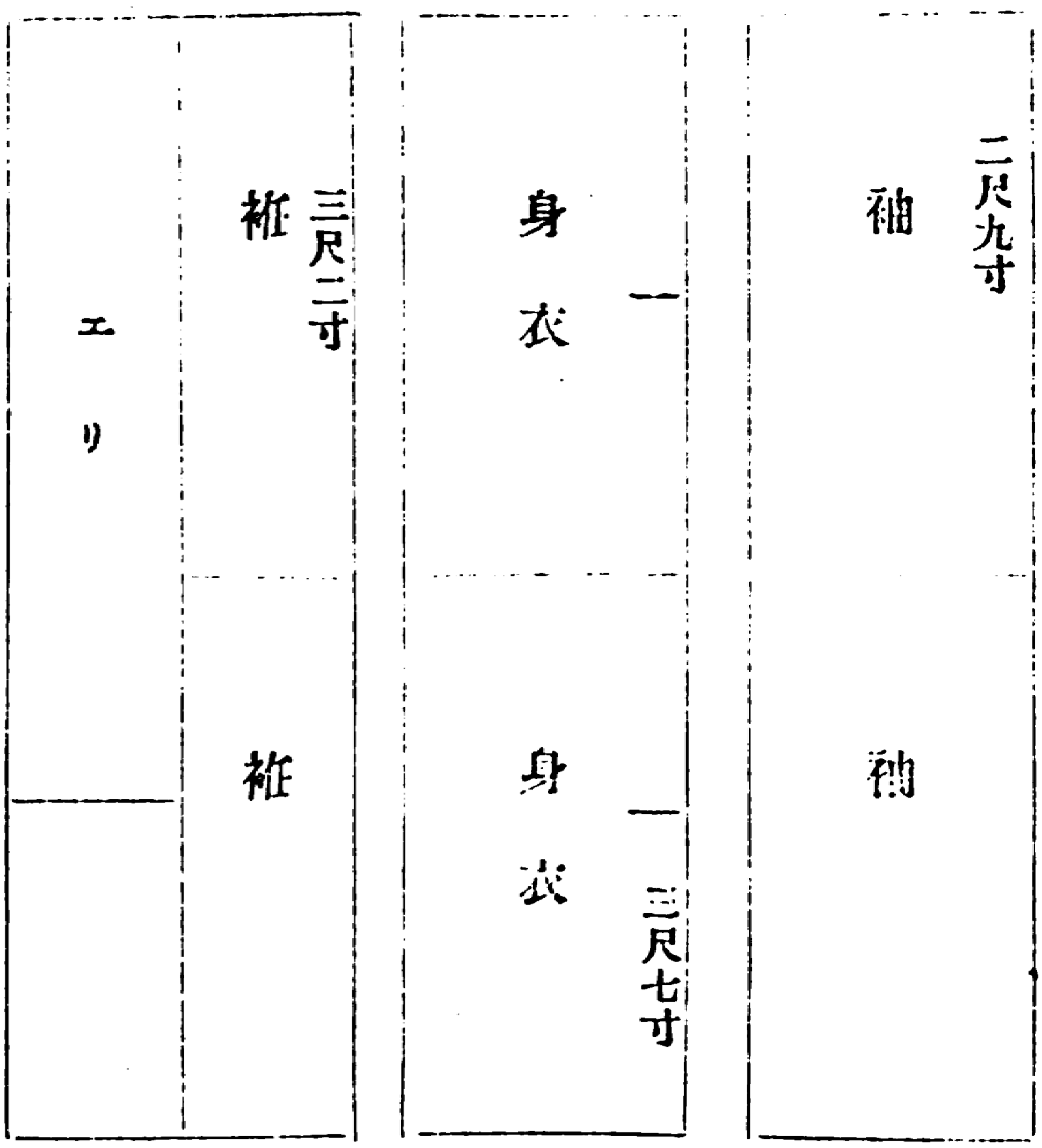
ものを、衽にはぎ付けて、二つに切るべし。



又衽にはぎをするをいとひ、または、共半襟をとらんなど思はゞ、袖だけとりたる殘りを、六つに折るべし。但し其の折り方はろの

六折のうちにて二枚だけは、衽下りだけ短く折りおくべし。さて、その四つそろひたる方を身衣となし、短くしたる二枚の方を、縦に二つに切りて、一方を襟、及び半襟となし、一方を又二つに切りて衽とすべし。後圖を見て裁つべし。

本裁の後圖

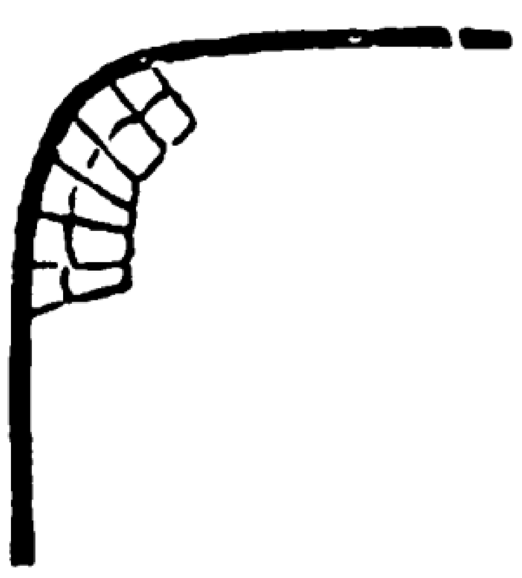


但し此處に記るしたる寸尺は、一反二丈七尺のものにてはかりたちしなれど、反物の長短によりて、身衣の丈などはよきにはからひ裁つべし。袖丈も此處には、大人並になしおきしなれど、其人によりて相應によきやうにたつべし。又裏の身衣はふきを出さねどならぬ故に、表の身よりは、少しく長くたつべし。もし反物みじかければ、身衣は長くなしおきて、袖にてはぐべし。但し女物は、ふりにはぎのいでぬやうに、はぎたる方を上になすべし。

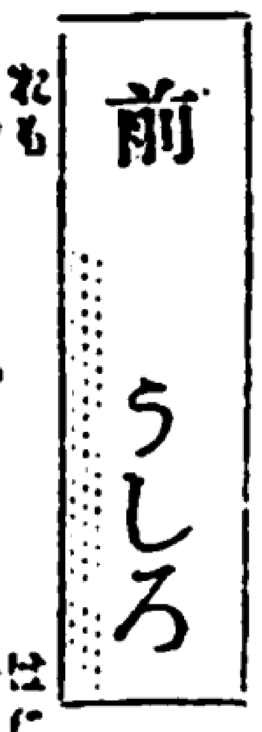
（十四）　女物單物の縫ひ方

單物、袷、綿入とも、其の縫ひ方は、小裁物と大方同じなり、先づ袖下を、表より一條ぬひ置き、引きかへして、袖口だけ明け置きてふりまで、縫ふなり。袂を丸くなさんと思はゞ、よきやうに袂の所を、丸く縫ひおきて、

丸縫の圖

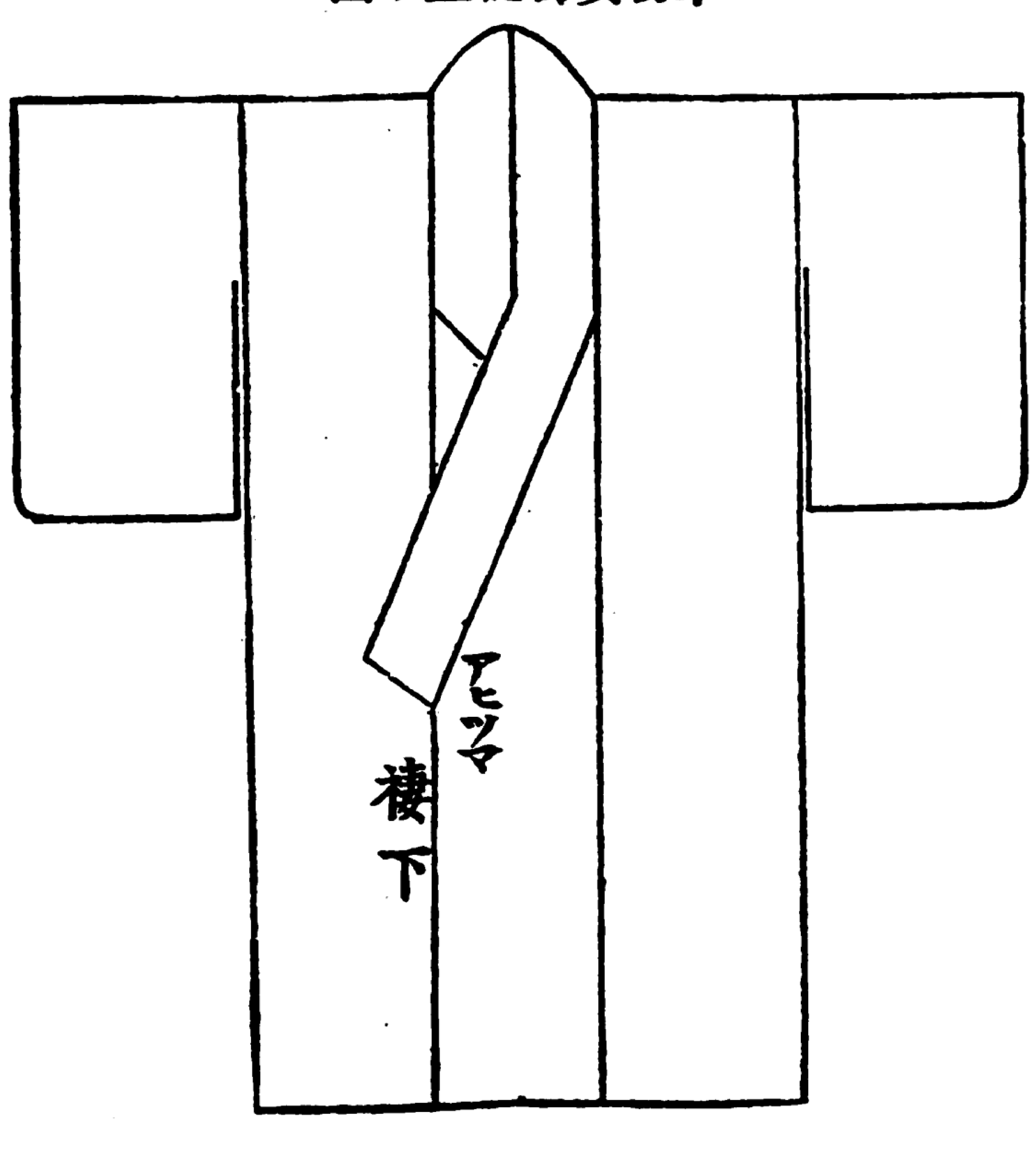


袖の丸縫圖のごとくに、ひだをとり袖口を絎け、引きかへすべしそれより身衣をとりて、背をうらより下の圖



の如く二條ぬふべし。肩當をあてんと思はゞ、まづ初めに、肩當の襟方を、身と同じにあけおきて、上下をうらの方へふせて縫ひ置き、よく身衣のぬりかたに合せて、二條目の背ねひの時、諸共にぬひ付くべし、背を縫ひ終らば、肩當の切れを、身衣の巾によく合せて、何れにも、袋のいらぬやうに注意し、身衣の方にしれぬやう、誠に少しばかり、針のめを出して、腋の方にてとぢ付くべし、又前の方も襟かた前巾等をよく合せて、ごく端をとぢおくべし、さてそてにて後巾と腋明を定めて、兩腋をぬひ、さて前巾をきめて、袵を付くべし、但し袵は、初めに褄下をくけれく方よろし、そして袵巾、あひづま等の巾、及び袵下りを定めて付くるなり。兩袵付けなば、裾絎をして、襟をつくるなり、裏襟をつけるには、表襟をつくるとき、身衣をさしはさみて、諸共に付け、襟先をぬひて、襟巾をきめて、絎けるもよし、又は表襟のみを、身衣に縫ひつけ、裏襟を表襟にぬひ付け、うらにてくけるもよし。そは何れにても、流義々々になし給へかし。それより袖をつけ、ふりくけるなり。

單物女物縫上り圖



寸尺等は女の大人並ならざ、後巾八寸、前巾六寸、衽巾四寸、アヒッマ三寸五分、袖巾八寸五分、袖口六寸五分、袖付七寸五分、襟巾三寸、褄下一尺八寸等なり、されど、年齢及び肥瘦によりて身衣の巾、袖丈、褄下等は見定むべし。

だいどころ

鰈のおろし煮

酒味淋又は砂糖にてもよろし其少量を水に加へて、鍋にて煮立て、其煮立ちたるを待ち、鰈の切身を投じ、次に醤油を少しづゝ注て、好き程に鹽梅し、扨て切身に火の通りたるとき、之を鍋より揚げ、鍋に殘りたる汁の中に大根「ヲロシ」を投じ少し之を煮、前の切身を皿に盛りて、其上に此大根「ヲロシ」を掛くるなり、但し魚を煮あげるには、煮笊即鍋の中に入る、緣無き笊を用ふるを便利とす。

鹿兒島汁

鳥肉を骨のつきたる儘大形にブツ〳〵に切り、（牛肉を用ふるも好し）鍋に水を澤山に入れ、此切肉を投じて凡二三十分間程煮るときは、如何肉にても柔かに成るなり、其の柔かになりたるとき、野菜（芋、大根、人參、牛房、葱、又は栗抔は、最も佳し）の外に油揚燒豆腐を加へ、又た煮るなり其煮えたるを待ち、其汁にて摺りたる味噌を延し之を裏漉にて漉して鍋に投じ、また煮ると二三十分にして出來るなり、生姜を細に切りたるを加味して、用ふるを佳しとす。

不老富貴大根

先づ大根の皮を剝き、厚く輪切と無し、鍋に投れて極軟になるまで湯で、之を椀に盛りて柚子味噌にて用ふるなり、但し椀に盛るときは之を煮たる湯を入るべし

又柚子味噌は柚子を「ワサオビロシ」にてれろ去漉したる味噌に之を加へ更らに味淋砂糖を摺り交せて好き程に鹽梅して作るべし。

鯆の酢の物

鯆の鱗を去り、三枚に卸し、小骨を取りて、水にて能く洗ひ、小口より細く切り、扨て器に鹽を盛り其上に美濃紙を敷き、前の切りたる肉を置き、又其上に美濃紙を敷きて、鹽をのせ斯くして三十分間程置くべし、別に大根の皮を剝き之を薄く小さく短冊形に切り、鹽を撒り掛け、軟になるまで好くもみて、洗ひ上げ之を酢に浸し置くべし、又別に白胡麻を煎りて能く摺り、之に味噌を交せで裏漉にて漉し酢、醬油（味淋砂糖杯加味するも好し）にて好き程に鹽梅し、斯くて前の切肉と酢漬の大根を此胡麻味噌に投じて、よく攪きまはし、用ふるなり。

右の胡麻味噌の代りに豆腐を絞り、之を擂鉢にて能くすり、食鹽（白味噌を用ふるも好し）砂糖杯にて、鹽梅し、前同様攪き交ぜ作るも味淡薄にて、佳きものなり。

鯆の甘露煮

活たる鯆を串に貫し（小さきものは横に並べて貫し大なるものは縦に一つ貫すべし）之を火に當て燒き、扨て鍋の中に輪切になしたる大根を敷き、其上に此の燒き鯆を置き水を澤山に注ぎ入れて、煮るなり、凡二三時間（鯆の大小によりて時間に長短ありと知るべし）程煮て後酒味淋砂糖何にても醬油に加味して、味を調へ更らに一時間程も煮るべし、斯くすれば鯆は骨まで軟らかになりて、丸のまゝ食すべき樣になるなり。



學園

日本文典（一）

鹽井正男

何事にまれ、普通の智識一わたり具へざれど、完全なる人といひ難しと思ひ立つ事ありて、女鑑愛讀の介嬢たちよ、おのれまた此處に、文典をお話し申すなり。

されど深き理論上にわたりたる事は、細には一々申さず。實地實用上に手近く必要なる事を、むねと心がけて話し申しあぐるなり。されど一わたり申さで叶はざる理論は、これを申さでは叶はねど、申すべし。

文典とは如何なるものにか

文典あるは文法と申すものは、如何なるものを申すにかといふに、われ／＼人々が、其の言語を、能く正しく美しく語り出でん爲めに、或はこれを能く正しく美しく文章に書きあらはさん爲めに、言語の大切なる法則を敎へ述べたるものを申すなり。されど、

日本文典とは如何なるものにか

と申すに、則ち我日本國の言語を、能く正しく美しく語らむために、又書きあらはさむために、日本の言語の上の法則を敎へ述ぶるものを申すなり。言語と申すものは、今更新しく申すまでもなく、人の思想感情即ち人の心の中に思へる事を表はすための方便なれど、何にてもよきやうなれど、これを正しく用ひざれど、第一に判りにくきのみならず、大なる誤解さへ招くものなり。言葉の行き違ひといふ話しは、よく世間にきくことならずや。しかのみならず、人はとにかくに、心が本なれど、心だに善く正しく美しけれど、それにて充分のやうなれど、言語文章も、また其人に附屬したるものなれど、言語の用ひざま、文章の綴りざま、善からず正しからず美しからずど、自ら其の人の品格を

落すものにて、こゝろは正しく美しかれとて、言語文章正しく美しからずと、つまりは不完全なる人といはるゝを逃れ難し。心は本なり、言語文章は末なり。本たる心は、素よりよく正しく美しかるべし。末の言語文章とて、また正しく美しかるやうつとめざる事のあるべき。されど日本人たれど、日本の文法一わたりは、是非に知らでは、完全なる日本人とは申し難く候。人の思想感情を表はすには、言語のみにはあらず。書を書きても、擧動を以ても、これを表はす方便とは成るべし。されど、言語が最簡便なる方便なり。されど、言語と申すものは、もと無形の音聲に過ぎねど、紛れも亂れも爲し易し。故に、これが法則を知ることも、また必要の事に候。

言語は、かく申すごとく、音聲より成れるものゆゑ、おのれが文典を述ふるに當りて、まづ一わたり我日本の國語を成立せる所の音聲の數及び種類或は轉訛などのことに就て、簡單にお話し致すも必要ならむか。

音格

音格と申すは、音聲の事に就きての一わたりの掟をお話し申す所なれど、斯く申すなり。わが國の國語に固有なる音聲は、其數五十あり。即ち五十音と稱するものなり。これを記すには、片假字(アイウエオの類)平假字(あいうえおの類)といふ二種の文字を以て爲す。圖に示せど、十行五段に分つべし。

圖の如く、十行五段となる。行とは、縱の五音を、いづれもゑか稱するにて、而して其五音の中の第一に在る音を取りて、これが行の名として、「あいうえお」の五音は、阿行と呼び、「かきくけこ」の五音は加行と呼び、「さしすせそ」の五音は左行と稱す。其の他の七行、皆斯の如し。段と稱するは、横の十音を稱するにて、これ又其の十音の中の第一なる音を取りて、これが段の名として、「あかさたなはまやらわ」の五音を、阿の

段の音といひ、「いきしちにひみいりゐ」の十音を、以の段の音とよび、「うくすつぬふむゆるう」の十音を、

	阿行	加行	左行	多行	奈行	波行	末行	也行	良行	和行
阿の段	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
以の段	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ
宇の段	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
衣の段	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
於の段	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を

	阿行	加行	左行	多行	奈行	波行	末行	也行	良行	和行
阿の段	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
以の段	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
宇の段	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
衣の段	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	ヱ
於の段	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

宇の段とよぶ、其の他の二段、また斯のごとし。故に「わ」といふ音は、阿行にて阿の段の音なり。「い」といふ音は、阿行にて以の段の音となる。「く」といふ音は、加行にて宇の段の音なり。其の他の諸音、皆これに倣うて知るべし。此處には平假字にて示したれど、片假字にて示すも、もとより同じ事なり。

此の五十音の中にて、阿行の「い」「う」「え」といふ三音と、也行の「い」「え」といふ二音と、和行の「う」といふ音とは、かれこれ殆ど同樣の音のやうにて、區別し難く、平假字にては同字を用ふるやうなりたれど、元來輕重の差あるごとし。古の人は、慥にいひわけたるを、平安の都に遷りたる頃より、區別し難く成りたる如し。

次手なれど、片假字平假名といふ文字の由來を、一寸お話し申さむ。片假字の方早く出來て、平假字の方が後に出來たるなり。我が國の極めて舊き頃には、文字といふものは無くて、支那の文字を以て、國語を寫したるを、支那の文字は面倒なる文字なれど、其點畫を省き、或は單に其片傍のみを取り、例へば「宇をウ」と

略し、「江をエ」と略したるごとき物流行したるを、吉備の眞備と申す人が、其の中より善き物を撰びて、五十音を標す片假字を造りたるなり。平假字も又おなじやうなる理由にて、漢字の草体をくづしたるものなり。僧空海が擇りあつめて造りたるものなり。

文法に、父音、母音、子音といふことあり。また發聲、單音、熟音など稱する事あり。

父音、母音、子音、

前條あげたる所の五十音の中にて、阿行の五音「アイウエオ」を母音と稱し、或は單音と稱し、其の他の四十五音(カキクケコよりワヰウヱヲまで)、子音或は熟音と稱す。父音と稱するものは、極めて不明なる聲にて、明にこれを示し難きも、やゝ「ク」「ス」「ツ」「ヌ」「フ」「ム」「ユ」「ル」「井」に似たる九音にて、此の各音と「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の五音とが、順次に相結ぶ時は、四十五音(加行の五音、左行の五音、奈行の五音、波行の五音、末行の五音、也行の五音、和行の五音)を、順次に生ず。例へば、

(クア	(クイ	(クウ	(クエ	(クオ
カ	キ	ク	ケ	コ
(スア	(スイ	(スウ	(スエ	(スオ
サ	シ	ス	セ	ソ

のごとき故、人の親子の關係になぞらへて、この九音を父音と稱するなり。而して、「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の五音を母音と稱するなり。父音と結びて、他の四十五音を生ずるがゆゑなり。而して、加行の五音より和行の五音までの四十五音は、斯の如くにして生ずるもの故、これを子音と稱するなり。故に例へば「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」の如きを、長く延してひゞかせて見よ、「カーア」「キーイ」「クーウ」「ケーエ」「コーオ」の如く、皆その末に、「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の韻ある如く、加行より和行までの四十五音は皆然り。子音は斯のごとく、二音の相和熟して成る音故、或はこれを熟音ともよぶなり。而して、これに對して、母音を或は單音ともよぶなり。五十音

の中にて、阿行の五音「アイウエオ」と、也行の五音「ヤイユエヨ」と、和行の五音「ワヰウヱヲ」とは、皆單に喉より出るゆゑ、これを喉音と稱す。加行の五音は、齒にふれて出るゆゑ、牙音と稱す。左行の五音は、齒と舌とに觸れて出るゆゑは、齶音と稱す。多行の五音と、奈行の五音と、良行の五音とは、舌に觸れて出る音故に舌音と稱す。波行の五行と、末行の五音とは、唇に觸れて發する音ゆゑに唇音と稱す。

鼻音と促音

五十音の外に、鼻音と促音との二種の音あり。鼻音といふは、例へば

ぶんてん(文典)　にんげん(人間)

などいふ時の「ん」といふ聲にて、元來鼻より出で、撥ぬるごとき聲ゆゑ、鼻音と呼ふなり。我が國古有の音に非ず、漢字入り來りてより、撥ぬる音をよむ爲に出來たる聲なり。此の鼻音は、一個のみにてはあらはれず。毎時他の音の後に附きてのみ出づるものなり。

促音とは、例へば

もつとも(最)　うつたへ(訴)

などいふ時の「つ」といふ聲にて、口に促るが如くにして發する聲ゆゑに、促音と稱するなり。これも又一個のみにてあらはるゝ能はず、必ず二個の音の間に挾まりてあらはるゝ音なり。前の例を見よ。

濁音

濁音といふは、五十音の中の加行の五音、左行の五音、多行の五音、波行の五音とが、濁りて發する音にて、其の數二十五音あり。而して、其の中に甚しく濁れると、半濁れるとの二種あり。甚しきを全濁音と稱し、半なるを半濁音と稱す。全濁音とは、加行の五音、左行の五音、多行の五音、波行の五音の甚しく濁れるものにて、其數二十あり。

ガギグゲゴ　がぎぐげご

ザ　ジ　ズ　ゼ　ゾ　　ざ　じ　ず　ぜ　ぞ
ダ　ヂ　ヅ　デ　ド　　だ　ぢ　づ　で　ど
バ　ビ　ブ　ベ　ボ　　ば　び　ぶ　べ　ぼ

此の全濁音が、我國語の上にあらはるゝ有樣より見る時は、二種あり。例へば、

くが(陸)　とが(咎)　はぎ(萩)　しぎ(鴫)
みぎ(右)　ふぐ(河豚)　とげ(刺)　かげ(影)
あご(腭)　ひざ(膝)　にじ(虹)　くじら(鯨)
もず(鵙)　かぜ(風)　はぜ(沙魚)　みぞ(溝)
くだ(管)　ひぢ(肘)　きづ(傷)　くづ(屑)
たで(蓼)　かど(門)　たば(束)　とび(鳶)
かべ(壁)　つぼ(壺)　かぶ(蕪)

の如き類は、本來濁りて發するものなり。これを本濁といふ。また例へば、

はるがすみ(春霞)　あさぎり(朝霧)　やまがは(山川)　をんなぐるま(女車)　あをげのこま(青毛の駒)　やまざと(山里)　のじま(野島)　さくらずみ(櫻炭)　ねぜり(根芹)　うめぞの(梅園)　をやまだ(小山田)　ふなぢ(船路)　やまでら(山寺)　もゝぞやし(桃林)　のび(野火)　たぶね(田船)　ふなべり(船椽)　おちぼ(落穗)

のごとき類は、二個の語を連ねて、一個のものと爲す時に、自ら下なる語聲の濁り來るものなり。例へば「春」といふ語と、「霞」といふ語とを連ねて、春の霞といふ一物に爲す時に、下なる霞(かすみ)が、「はるがすみ」といふやうに濁り來るなり。これを連濁と稱す。「はるがすみ」といへば、春と霞との二物を云ふに非ず、春の霞といふ一物をいふなり。すべて二個の物を連ねて、一個の物と爲す時は、斯の如く必ず下なる語を濁らすべし。「はるかすみ」と云ふやうにいひては、二個の物を云て一個の物と爲す能はず。能く人の誤る所なれば注意すべし。やまかは(山川)といへば、山と川とを意

味し、やまがは(山川)といへど、「山の河」を指すやうなり。其の區別よく〳〵注意すべし。(つゞき)

日本古代文學案内

武島羽衣

明治の今日は、實に科學的研究の時代なり。科學的研究とは、只漫然と、しだらなく學問するとはことかはりて、組織的に、秩序をたてゝ、ものごとを研究するをいふ。こは、今の時代が、古への時代と異なる大なる標章にして、實に開化せる世紀の特質なり。我國の人民は、もと能く歌ふ人々なれども、あまり理屈をいふ人民にあらず、古來、萬世一系の　天皇に仕へ奉りて、其他を顧みるに遑あらざりけれど、自由權利などと唱へて、こむづかしき理屈なども、說かず、またわれらを始めとして、天地の諸物は、皆神々の作りたまひけるものとして、つゆ疑はざりけれど、別に、天地の起源、人類の起りなどにつきて、やかましき哲學の議論もなさず、極めて溫和に、きはめて大やうにして、あまたの星霜を經過し來りけれど、自然、議論理屈をいふことは、人の注意せざることゝなりて、こゝにいはゆる科學的研究などいふことも、毫も發達せざる趨勢に陷りしなり。

されど、今日よりは、勿論、舊來の弊習をすてざるべからざるのみならず、又廣くこの科學的研究の方法を用ゐて、諸種の學術技藝を考察することは最必要にして、ことに、われ〳〵日本文學に力をいたさんとするものは、此方法もて詳しく日本文學の上を攻究し、其起源をしり、變遷を察し、また其長所特質なども研究せざるべからず。而して、これらの事業は、單に男子にのみゆだぬべきことにあらずして、女子もまた、奮つて、これに一臂の力を致さゞるべからず。今日の女子は、花山一條頃の時代における御達女房とはことに

して、また徳川時代における御殿奥女中とも同しからず。平安朝の御達女房は、日々のつれ〴〵に、物語を讀み和歌を詠ずるをもて、其生涯の事業としたれども、今日の女子は、單に是れにのみ止まるべきにあらず、將軍が殿中の奥女中は、女庭訓女大學に、そが一生の身だしなみは終れりとしたれども今日の女子は、また只にこれにのみ滿足すべきにあらず、なほ一歩これより進みて、年代を追ひ、順序にしたがひ、少なくとも、組織的に、わが文學を研究せざるべからず。もとより、日用文鑑により、あるは日本文範を讀みて、伊勢源氏枕の草紙落窪などの文章を、きれ〴〵に秩序なくよみ味へんことも、また作文の資料として、一方の必用なるべけれど、他方に於ては、必ずや、歴史的にわが文學の起源變遷につきて、歴敍するところなかるべからざるなり。

おのれさきつ頃より、日本文學史を編まんとして、あまねく材料となるべき諸書をあつめたるに、そが數極めておほきに上りぬ。由りて、其中より、最必要なる書籍の名、及其解題をあげて、諸君が、他日、わが文學を、歴史的に考究したまはん時の參考に供せんとす、此回は、只古代文學案内としるしたれど、もとより回を重ぬるにしたがひて、次第に、奈良平安源平などの時代にまでもおよばんとする心なり。

さてこれらの參考書を列擧する前に、少しくいふべきことあり、そは一國の土地氣候及人民の風俗と、其國の文學との關係なり。一國の文學が、其國の氣候土地及人民の特性によりて、影響せらるることの大なるは固より言をまたざることにして、われらが、一國の文學を研究せんとするにあたりては必ずやまづ、其氣候土地人民のありさまの如何を考察せざるべからざるは、實に此故なり。されどこゝには、まづ日本古代の土地氣候人民の風俗の參考となるべき書籍より、かず〴〵

列擧すべし、

第一　大古に於ける土地人民につきて、しるしたるもの。

(一)古事記上卷。

この中にて、大古の土地の豐饒にして、米穀のゆたかなりしことより始めて、氣候の温和にして、諸種の動植物のあまねく地上におほかりしこと、いとあざやかにしるされたり。さて、古事記は、字句きはめて古雅にして、まゝ晦澁のところぐ\もあれど、詳くは、宣長翁が古事記傳、あるは平田篤胤翁が、古史傳などにつきて見るべし。

(二)日本書紀神代の卷。

此書は、古事記よりも後にいでゝ、かつ虚飾おほき漢文もてかゝれたれど、全くは信じがたけれど、あまねく諸家の説をも引きて「一書に曰く」として載せたれど、きはめて必要なるところぐ\もあり。此書の注解は、其數あまたあれど、清宮秀堅が、書紀集解最明瞭にして精緻なり。

(三)大八洲史(久米幹文先生著)。

此書は、著者が、日本歷代の、歷史の、漢文あるは古雅の文もてしるされたるがために、兒童にたよりよからぬをうれひ、古事記日本紀、あるは舊事、あるは延喜式、あるは古語拾遺、其他あまたの古書より、要を撰び精をあつめ、ことぐ\く簡易なる平假字文にひきなほしたるものにして、古事記日本紀などを讀む力なき女子兒童などは、必ずまづ始めに讀むべきの書なり。

(四)日本文明史(物集高見先生著)。

此書は古今の日本風俗人情のありさまをしるしたるものにして、わが文學の變遷をしる上につきて、きはめて參考となるべきところおほく、ことに大古の土地氣候人民の精態などをのべたるところ

は、すこぶる精緻にして有益なるものおほし。
（五）本邦の人種及言語（文學博士星野恒先生講。史學雜誌所載）。
こは星野博士が、大古の歴史的事實、あるは言語の類似の点などより、日本と朝鮮との土地大古は今よりもなほ接近して兩國の人民に、相混合し、言語のごときも、共に同一のものを用ゐたりしなどといふことにおよび、日本人種の起源につきて、すこぶる參考となるべきふし〴〵多し。

第二　大古の風俗につきて、しるしたるもの。

（一）古事記神代の卷。（前に出づ）
（二）日本書紀神代の卷。（同上）
（三）大八洲史。（同上）
（四）古代の風俗（文學博士小中村淸矩先生講。皇典考究所講演所載）。
こは小中村博士が、神代の風俗の一斑をしるされたるものにして、敬神の風より始て、尙武禮拜のならはし、衣服頭髮のさま、あるは結婚喪葬の、風習など、例をあげて、詳く説明せられたるものなり。
（五）本邦大古の衣食住（文學博士黑川眞賴先生講。皇典考究所講演錄所載）。
こは博士が、神代の衣服裝飾、食物、家屋のありさまを、古史に徵して、こまかに、叙述せられたるものなり。
（六）日本古禮の一般。（本居豐穎先生講。皇典考究所講演錄所載）。
こは、本居氏が、日本の古禮を區別して、神祇に仕ふること、祖先をまつること、婚結の禮、葬祭の禮、衣食住につきたる禮、送迎の禮、侍者を定むる禮、拜の禮、拍手の禮などにわかち、一々こまかに説明せられたるものなり。
（七）日本風俗史（藤岡作太郎、平手鑑二郎二氏著）。

この書は、おほねく古來の史乘隨筆をあつめて、考察精緻に、引證該博に、世にたぐひなき好良の風俗史にして、其始めなる大古の部を繙かむ、當時における風俗の一斑は、げに一目瞭然たるべきなり。

(八)祝詞考(加茂眞淵大人著)。

この書は、眞淵翁が、延喜式八の卷にあつめたる祝詞を注釋したるものなり。祝詞は、重に、神代以後に作られたるものなれども、其中に含められたる思想は、實に大古よりつたはりし思想なり。されど、祝詞をよまむ、また大古における敬神の風、並に神と人民と、いかに親密の關係ありしかは詳しく察知せらるべし。

此他、日本大古の風俗をときたる書、きはめておほけれど、あまりに煩雜にすぐべければ、これに止め、次にして、直ちに、日本大古文學の起源につきてしるしたる諸書につきて、のぶることあるべし。(未完)



歸家日記(つゞき)

故人　井上通子　遺稿

堀田璋左右　寄贈

十九日まだし行て舟にのりて、桑名に至るほど、七里なりといふ、追風吹てとくつきぬ、又かりそめの宿りに立いる、家作りいとおもしろし。水にのぞみてたてたる所なれど行かふ舟を見おろして、すゞしげなり。城もむかふざまにまぢかく見ゆ。されど海より吹來る風のなまぐさきにほひにて、とく爰を出なんといふ、所の肴はまぐりなど調じて、おもの出す。やがてこゝを出ゆけど板橋、土橋、小川などおほかるわたりなれど、此頃のてる日に水みなかれたり。四日市といふ所

にやどる、日毎にたつ民の、など四日とかぎりてつけたるさとの名ぞ。

二十日四日市を出づ、つゑつき村といふ坂をすぎて、石藥師にいたる。ぐしたる女などまうで侍る也。それよりわりて。庄野といふ、こゝにちひさきたはらを、をかしげにむすびて、燒米すこしばかり入て、わらはべのもてあそびに賣を、そのかみ家に在し時あづまのつてに人の得させたるを思ひ出れど、けふはさる物もゑず、いとながきはしを渡る、龜山を過て城いときように見ゆ。ゆき〳〵て鈴鹿の關にいたりて、ひるのほどしばらくいこふ。今は關の戸ざしもなくて、行かふめり。名高き地藏ありとて、人々詣てぬる、みづからは心もれもむかねば物ごしにみやりて過ぬ。坂の下よりすゞか山の、けはしきを登る。河音さやかなるは八十瀨の浪のこゆるにやとわれもはる。田村堂のわたりといふうち、おもき荷どもおほくにないもてくる人々に行逢たるせばき、道なればいとあやうし。

　鈴鹿山こえていくそのとしつきを
　　ふりにし道にまたかへるらむ

人生何事多㆓艱險㆒、千里往來山又河
九載遠㆑親今漸近、再經㆓鈴鹿㆒思㆓蹉跎㆒

またあづまに侍りしさいつころ、佐渡守殿御國へ歸らせ給はんとて、對馬守殿の御前に、御暇乞とて入せ給ひしをりに、わらはもかしこに侍らふときかせ給ひて、めし出て過にし方の事、歌の御物語など仰られたるついでに、古鄕に歸侍るときはいつ頃と、さだめぬるぞとゝはせ給ひたるを、秋の頃にてや侍らんと申たりし、思ひの外にいそぎ立て、けふ其御國の近きわたりを過れば、

　なつ衣たつ日をはやくしらませば
　　わきとは君にこたへざらまし

かにか坂とかや、山の中をめぐり行て、土山に至りて、

今宵はこゝに宿かる。

二十一日、水口の市店に出れど、商人の家々をいとうるはしきくみ、葛籠の調度どもれはく並べ置たる、めもあやなり。小さくをかしきをすこしかひ得てみつゝ行、石邊とかいふ所に、晝のほど立よる、此逆旅過し卯月の頃、をほくやけ侍りといふ、げに皆かりそめにかこひたる所のみ、長くつゞきて、あはれに見ゆ、よき家どもはみなやけぬ、小家がちなる所のみ殘りて僅に人ともものあきなふ也、げに玉も石もともにやくるといへど、山ならねど、此さとにも出て、かくあさましく灰になしけるよ恐ろしき物は火なりと思へど、水と風とも、又おそろし。人をすくふものといへど、過れど又人をそこなふなり。三上山のあたりをみやりつゝ草津川を渡る、草津の驛にいたりて、今宵はこゝにかり枕の夢をむすぶ。

二十二日、朝たちて野路の篠原の名もなつかしく行過ぬ。

いとはやも露もこぼるゝ秋たてど
　きのふかきゝし野路のしの原

勢田の長橋を、渡るほど、左のかたなる石山をみやりて、ゆかまほしき心地す、紫式部の物語かき給ひけん、はるかなるむかしなれど、おもひ見る程、いと其をりの、目のまへに浮べるやうにおぼへて、

勢田橋上與簾裏、遥見石山思古人、
紫式部名高且遠、光源氏語麗還新、
殘峯秋月浮平洛、巡麓江湖通大津、
天色水容明若鏡、客心對此洗塵埃、

世に殘すことをしきけど
　石やまのみねとこひしきいほぐみの人

行成卿の女のおもひにて、かしこにこもり給ひし頃、山よりふかく入やしなましとなげき給ひけん、われは我君の三日月とともにかくれさせ給ひし、見るだに二た

ひみえさせ給はましかば、いかならんいははをもたけく分のばらましをもふにも、

　石山のやまよりふかくいりてだに
　　かくれし月をまた見ましかば

粟津の森とかやきゝて木曾義仲の討取られたまひけん昔をさへたもひやらる、今井か塚とて松一もと見ゆ、さるとぢめにいたるまで心をかへずして、ともに亡びけんものゝふのほいなるべし、君をいさめて正しき道におもむかしむるは、なほいと難きわざにてろ、ひゑの山見ゆ、三井寺も近きわたりにありといふ、膳所とかや、河水に影うつせる城いとうるはしく、日にかゞやかされたる、汀をまちかく過行、水の面廣々として、近くなるまゝにいひしらず、ゐんにれもしろき景色をふくめる事かずかずなり。日もいとよく晴わたり、秋のなかばの月かげの、此水にうつりたらんほどを思ひやるさへ、ゐならぬ心地す。

　行さきのまだとほけれど草まくら
　　ふし見のさとに夢もむすばず

大津より伏見にいたるほど、商家軒をならべて家々にれとらじと、かずかずの物どもをかけ並べうる、あづま人を惑はすべきたくみなるうつは物ども多きもをかし、晝やどる所に物うる女ども、多くつどひ來りて、なにくめせなど勤むるも賑はし、物縫べき針など、殊におほかるは、是ぞ女の目とどむべき所なる、繪かくものあまた見ゆ、ちから車にかけたる牛、隙なく行逢たる、うるさくいぶせし、こゝは逢坂山といふ名に、なにとなくなつかしく、おぼゆるにも、例の、

　逢坂のせきならなくに今は世を
　　へだてはてぬる君ぞかなしき
　關の戸もさゝで行かふあふ坂は
　　夕つげどりのろらねだになし

なほえむし行、舟ともおほく浮べ、あるひは岸によせ

たる、堤を過てかりに宿りに入て、舟にのるべきよろひして、これより河舟にて下る、夕つがた淀のわたりを過ぐ、こゝは石川主殿頭殿の御領なり此御よめの君は、過にし我君の御子と聞えさせつ。故日向守殿の北の方にて渡らせ給ふか、男君はやくかくれさせ給ひて、今は御子達などのおとなびさせ給へるを、御なぐさめにてすぐさせ給ふ。ちかき比までまゐりなれて、御心ざしことに御恵ふかゝりしも、露わすられず、かねて此當りを過なん事を、おぼしのたまはせて、思ふまゝなる世ならましかば、諸ともに行きて心行ばかり、あるじせばやなどさま〲に、語らはせ、給ひたる、おもひつゝけられて、こぎ行舟もしばしよどみなむと、いと御名ごりをし、水車のめぐりて、御城の内へかけられたる筧に、水をまき入るゝが、たくみなるもいみじう面白し、われも浮世にめぐるとをしれどいはまはしき、むげに近きほどをこぎゆけど、いとよくみゆ、岸のうへに御家の士ども番する所に、やりんとうの御紋の幕うちて、ならびゐたるもあり、御城は河水に臨みて、築かれたることなれど、浪のおし動すやうなるもたぐひなく見所おほきわたりなり。浪にひかれて下り行まゝ、岸のうへなる家どもあとのかたにしぞくやうなるもをかし。商人の家、民の家ども、町をたてゝはるかに、續きたり、暮行ほどに火の光、星のごとくにて、松の間よりみえかくれす。かなたこなたと里の名ども聞過ぬ。八幡山も近く仰がれさせ給ふ。わが氏の御神と心に仰ぎ奉る。あつかりし名殘むつかしけれど。河水をくませてのむに、猶ぬるけれどすてつ、舟のろよく〱となるを聞て、戸を開きてみれば蘆の茂りたるを分け行なり、月はまだ出ざれど、星の光りにていづくもよくみゆ。帆かけたる舟どもおほく引のぼすかこなたざまにくるをば、よきよと舟人のたがひによばはりたるも、なに事をいふならんとおそろし。蚊の

いとおはくて、扇をはなたず、手馴しをれど、打まどろむべきいとまもなし、益本はつみたる物どもの上にのぼり居て、秋の水みなぎり落てと、靜にうたふほど、山の端ならで出る月影も、澄わたりて、心ぼろく哀れなり。かくてとらの時すぐるころ難波につきぬ。舟とめてこゝに君の御家あづかりたる人のかたへ、かくとあないきこゆるに、きのふ今日かねて待ち侍りとて、こなたへとあれど、いとうれしく乗物して、此人のかたに至りぬ、待とりて夫婦もろ共いたはり、あるじしていこはせらる。

廿三日、けふはゐさらぬ事あれど、あす舟にのるべしとて、今宵はこゝにやどる。ますもとは隣なるやに壁ひとへ隔てゝやどる。あづまにつかはすべき文ども書と聞て、わらはも只一つ急ぎかきてやる此所までたひらかにまゐり着ぬるよしを聞え奉る也。あさでなん此近きわたりなる天滿天神の祭なり。こよひより御試樂にあたり侍るといふ夕がゝりて、あるじの女房のさろひ給へるにより、我もつねに仰ぎ奉る御神なれど、いとよき事なりとおもひて、ともに詣で侍るさほさしのぼるほど面白きわたりにて、こゝろ慰さむわざ也。めもおどろかるまでおほかる舟とも、かなたこなたの岸によせならべて繋ぎ置たる、よきもあしきも、大きなるも小さきも、こゝらつどへる中をこぎとほる、こなたの舟は逍遥の爲に作れるやがたなり。ちひさくをかしげなれど、かしこにもさなんおもふらんかし、なには橋とかやさま〴〵なる名の橋とも、かず〴〵多かる下をゆくは、柱にさはりもやせんと危けれど、近くなるまゝに廣らかにみゐて、安くとほりぬ、やゝこぎわたりて、心ざす岸につけて、皆おりぬ。宮居も程ちかけれど、則詣でゝ神樂奉る、いまだ火ともさぬとうろうども、こちたきまでかけならべたり、まゐる人、男女とればしあざれわたりぬべきようにして、やがた車

などはしらかせて、わらはべれどな〻ども、あまた引ありく。いとらうがはしく、かたはらにさけ、是をみつ〻元の舟に乘る。こぎ歸つ〻見渡せどなほ岸の上に有つる人ども、多く車のつなに取つきて引めり。これよりよき物見なりとて其かたにしどらく舟とめて、みやれどわらはべのさかしきが、太皷うついとはやき拍子にのりて、さまぐ〱に物狂はしきまで跳りさわぐを、れとな〻ど居てはやし興ずるなり、や〻久しく奏で〻、もとの道に引いる。けしきなれど、こなたも舟こぎ出して、こたびはもときし中嶋のうしろのかたを、こぎかへるといふめれど、水のうへは、たゞれなじ雲の浪とのみおぼえて、いづち行らんもれもひわかたず、西の國々領し給ふ君の、御屋敷ども岸にならべて、さし出引入とりぐ〱に作られたる、きらぐ〱しく嚴重に見ゆ。ろこ〱の舟ども、御みづからのめすなどは、なほうるはしく、幕のもん鮮やかに いちじるし、暮か〻るま〻に多の舟ども、火たきたるが、笘の隙よりほのかに見ゆるもをかし歸入てすゐはんなどくひて、みなぐ〱いぬ。

廿四日、けふはとくより舟にのるべしといへど、潮またし午の過るほど〻いへど、ためらひ居るほど、物賣る者よびてあづまにも、故郷にも幼なき子供のもてあそびに、おくるべき物などみる。しどしありて、汐みちぬ。舟出すべきよし、舟人きていふ。益本も出きて、是より打つれて舟に乘る。あるじの人ふたりも、おくりして、舟にきたり、いとまこひ行、さきの祝ぎなどいひて、立歸へらる。やをらこぎ出したり。

　けふこのうらを舟出しぬとは
　ふる郷に待らむおやにしらせどや

しどらくこぎゆきて、すこしくまある入江に舟とめぬ。又未の過るほどなり、風あしければ、かくなんといふ。いとせどき所にか〻まり居る。是を常の住家とせど、

いかにわびしからましとぞ思はる。あまた泊りする舟どもならびゐて、さはのうた歌ひ、かひふきなどす。わづかにみ出したれば、よべとまりし方は早多く隔りつゝ、其かたは夕だつけしきにみゆ。いくらばかり來つらむといへば、こぎ出し所よりは三里ばかりまゐり候といふ、かたしく袖の枕の下に、浪の音たかく聞ゆるも哀れにれそそし。（未完）

小兒のそだてかた

故人　貝原益軒

凡小兒を育つるに、初生より愛をますべからず、愛すれば、却て兒をそこなふ衣服を厚くし。乳食にあかしむれば、必病多し。衣を薄くし、食を少くすれば病少し、富貴の家の子は、病多くして身弱く、貧賤の家の子は病少くして、身強きを以て其故を知るべし、小兒の初生には、父母の古き衣を改め縫てきせしむべし、衣の新くして、温かなるは熱を生じて、病となる、古語に凡小兒をあからしむるには、三分の飢と、寒さとをおふべし、といへり。三分とは十の内、三分を云ふ、此心は少しは飢しめ、少しはひやすもよしとなり。是古人小兒をたもつ良法なり、世俗是を知らず小兒は乳食を多くあたへて、あかしめ、甘き物くだ物を多く喰しむる故に氣ふさがりて、必脾胃を破り、病ひを生ず、小兒の不慮に死する者は、多くは是によれり、又衣を厚くして、温め過せば、熱を生じ、元氣をもらすゆゑ、筋骨ゆるまりて、身よわし、皆是病を生ずるのみなり、唐も大和も、古より童子の衣の脇あくる、是童子の氣さかんにして熱多きゆゑ、熱をもらさんか爲也。是を以て小兒をあたゝめ過すが惡敷事を知るべし。天氣能時は折〱外に出して、風日に當らしむべし。此の如くすれば、はだへ血氣つよく成りて、風寒に感せず。風日にあたらざれば、はたへもろくして風寒に

感じやすくわづらひ多し。小兒のやしなひ法をかしづき育つるものに能云聞かせ敎しへて、心得しむべし。小兒を育つるには先乳母かしづき隨ふものを撰ぶべし、心おだやかに、邪なく愼みて、言葉少きをよしとす、惡かしこく、口さゝ僞りを云ひ言葉おほく、心邪にしてひがみ氣たけく、はしいまゝに振舞酩酊を好むもあしとす、凡小兒は智なし。心も言葉も、萬の振舞も皆かしづき隨ふものを見習ひ、聞習ひて、彼に似する者なり。乳母かしづき隨ふ人あしけれど育つる子、夫に似て惡く成故に其人を能撰ふべし、貧賤なる家には、人を撰ぶ事かたしといへど此心得有べし。いはんや位高く、祿富る家をや。

凡小兒を育るには、專義方のをしへをなすべし。姑息の愛をなすべからず、義方のをしへとは、義理の正しき事を以て、小兒のあしき事をいましむるを云ふ、是必後の福となる、姑息とは、婦人の小兒を育るは、愛に過ぎて、小兒の心に隨ひ、氣にあふを云ふ、是必後の災となる、いとけなき時より、早く氣づゐをおさへて、私欲をゆるすべらず。愛を過せど、驕出來、其子の爲災と成る。

女の四德

故人　仲丈敬甫

女に四德あり。また四行とも名づく。周禮に見えたり。一に婦德、德は心にそなふる善なり。二に婦言、言は口にいふ言葉なり。三に婦容、容は身にあらはすかたちなり。四に婦功、功は手にとるわざなり。婦德とは、かならずしも、才智の世にすぐれたるをしも言はず、たゞ貞順愛敬の心をむねとす。よく身をまもり、人にさからはず、あはれみ廣く、つゝしみ深きをいふなり。婦言とは、かならずしも、辨舌のあざやかなるをしもいはず、たゞ聲低く、言葉にこやかにて、數少く、

うやうやしきをいふなり。婦容とは、かならずしも、容儀のなよびかに、衣裳のはなやかなるをしもいはず、たゞ身もち、きぬきのそこ清く、立居振舞の優にてしづかなるをいふなり。婦功とは、かならずしも、藝能人にすぐれたるをしもいはず、女の事とする所、衣食の外なけれど、うみ、つむぎ、たちぬふわざなどは、かならず手づからしならひ、祭禮賓客のもてなしより上下朝夕のことまでをも、みなそのすべしりて、つねにも、用意すべきなり。またわが夫君親かたなどに參らする食物は、かならずみづから心をつけて、みそなはしすゝむるを道とす。

人の敎訓

壚井ふく子

良藥は口ににがく、諫言は耳にさかふといひけむ。幼きもの、心いたらぬ人などは、とかくに、人に敎さとされ、叱られなどするをいとひて、己の過をあらためむとはせずして、其の人を恨みそしりなどするものいと多かり。されど、過のいや加はり行くは、病ある人の良藥を厭ひて、病のおもりゆくと露異ならず。あさましき限りになむ。孔子も、過ちては改るに憚ることなかれと云はれしにあらずや。人に過ちなきはあらじ。まして年わかき人をや。人々誠に藥のむをいとはゞ、まづ一度は其の藥を服用して、早く病をいやして、再び病にかゝらぬやうにすべし。誠に叱らるゝを厭はゞ、まづその敎へ喩されし言の葉を服膺して、過を改め、ふたゝび過なきやうにすべきなり。

昔柳澤里恭といふ人の妻は、年なほわかけれど、物毎にさとくて、何事をなすも人に立ちまさりたるが、中にも、一際物ぬふ事にすぐれて、小袖など一日に一重ねづゝ縫ひて、餘のことまでもことかゝず、縫ひざまも誠にめでたくて、年久しく其のことにのみ從事し

て、いとたけたる職人どもさへ、うち見ては、驚くぞかりに上手なりけれど、里恭も不思議におもひて、或日妻を賞めたりしに、妻のいふやう、妾もかく裁縫ふ業に熟したるも、故あることぞかし。妾は三歳にて生の母にわかれ、継母に育てられしに、其継母いときびしき生質にまし〳〵て、實の子にあらねど、教訓のたらぬと、のち〳〵にそしられむは口惜しとて、五六歳の時より、水仕業を命ぜられ、七歳より、手習もの讀み、裁ち縫ひの事ども、かつ叱り、かつさとして、教へ導かれしに、其の時には、烈しき母上よなどうらみし事もありしかど、今となりては、誠に御慈愛のほどの、身にしみてうれしう覺え侍りと、涙をこぼして答へしといふ。誠にその身の爲めをおもひくるゝ人は、いつもあまき言の葉のみは、云はれぬ物なれど、人々よく心して、人の教へ、人の諫言などを、かりそめにも、うらみそしりなどする事なく、拳々服膺して、過なからむことを期すべきなり。かくいふも、人の諫言に、腹だちなどするせまきこゝろの我身につまされてなむ。

酉の市　七五三の祝

井上頼文

十一月酉の日毎に、府下の足立郡、花又村鎮座、大鳥神社をはじめ、府内、淺草、四ッ谷等の同神社を祭る事あり。是を酉の市、又は酉の祭といへり。此日、竹把、粟餅、芋頭をひさぐ者多く出づ。開運の守護神也とて詣づる人多し。中世は、靑竹の茶筌をうりかう事ありしといへど、今は絶果て、かの熊手の大きやかなるをひさぐ者いと多し。又此月には、七五三の祝といふ事あり。十五日をもて、むねといとなむ。これは、三歳の男女の髪置き、五歳の男子の袴着、七歳の女子の帶解なり。むかしは、女兒のいはひに、おらが、又、た

すきかけと名づけて、麻苧、眞綿に末廣、松梅の作り花などを、胡粉の水引もて結び飾り、かつがしめて、うぶすなの神にまうづることなりしかど、近き年ごろは、さることとなし。たゞ、おの〳〵そのほど〳〵に、あたらしうとゝのへたる、きぬどもを、着よろひ、まづ産土神にまうで、それよりうからやからの家々をめぐり、その夜親しき限の人々をむかへつどへて、ねんごろにあるじゝ、打ちわけ遊び、ほぎどよもせど、たゞに、めづ子がおひさきのさいはひをのみ思ふ、親の心の闇に迷へるわざにはあらじ。其家のため、のちの榮えを、もはらねがへるしたの心のほにあらはれし、いとなみごとなるべくや。

瀧の川の紅葉

不平男

わづかに王子の町を隔てゝ、近く飛鳥山と引きつゞきたる岡を、五六町あまりゆけど、金剛寺といふ寺あり。王子瀧の川村の金剛寺とて、閼伽井の水も、いとふるき昔よりすみつかれにし御寺なりといふ。境内はいと狹く、名山名石は、もとよりあるにあらねど、さゝやかなる溪川の流れありて、水あをく、ふち深く、やゝ嶮しき崖を爲したる岸に臨みて、かへでの木こゝら植ゑたるが、秋の末もみぢするころは、やゝ紅の山錦の流れ、秋の一小山水を爲すものから、瀧の川の紅葉とて、秋くれかゝれど、都人の袖ふりはへて、紅葉狩るべき名所とはなりぬ。

山里に生れたれどにや、山水草樹を愛するおのれの僻にて、都にうつりてより、學の窓のいとまには、秋は殊更、春さへ夏さへ稀れにはとひぬ、さゝやかなれど、溪流のけしきが、故山のやうなればなりけり。また風雨にまかしたる樹木、草にまかしたる崖や岸の、露ばかりも粧り搆へたる所なきが、一かど面白くれば

えてなりけり。
さるを、一歳まちかけて、秋の末おとづれたるに、つねにわがゆく袖を招くがごとくおぼえたる岸の小草のなつかしき袂は、いつしか殘りなく刈り掃はれて、あかく黒き岸の土くれが、いまはしくも、むくつけき面を、あらはにさし出したるも、あさましく胸わるきに、崖の上には椽臺いくつとなく据ゑ、毛氈しきつらねて、里の少女どもが茶を煮てすゝむるは、あしくはあらねど、そが中に西京生れとおぼしく、女のごとき男が、舌だるき猫なで聲して、いはでもよき言をつくりいひ、笑まずともよき事に、殊更につくり笑ひなどして、一向に媚を呈するさま、うち見るより嘔吐を催さんぞかりおぼゆれど、早々に袖を拂つて立ち去りたるより、其後は絶えてまたゆかずなりぬ、さぞかりに



つねに訪づれたる身も。何事にても殊更に粧り飾り殊更に結構するといふ事、いたく忌まはしく、あらずもがなにおのれは思へばなり。何事にても、あるがまゝがよし。つくるといふ事、きたなきことなり。さればぞ世の中の人、大かたはきたなきなる。

かくて三歳四歳ゆかず、一昨年もとはず、去年もたづねず、今年はさてもいかにかなりけむと思ふ折りから、久しうなりたる昔の友來りて、さても互に世にうつり變りたる事よ、諸共になれ〳〵て踏みたる野山は如何、いざけふはこゝかしこ名殘の秋をたづねむといふに、さらばとて道灌山より山づたひ飛鳥山をも越えて瀧の川をわたれば、水色むかしのまゝに流れて止まず、崖の紅葉のすぎにし秋の色に出でゝ變らぬに嬉れしく、ありつる岸のむくつけき面は、なほかつ〳〵見ゆれば、今日は彼の胸わるき猫聲の女なせる男の見えざれば、心地すゞしく、あどけなき女の童のくみてすゝむる茶の薫り、一入ゆかしくうち悦びつゝ、うちわたせば、此の年月よそにすぎにしわが身の、今日は、われと恨み出でらるゝもをかしきばかりに、たのしくうち見たるに、あやしや近くきこゆる猿の笑ひどよめく聲、馬のぶみとゞろかす音。

あなやと見かへれば、猿もあらず、馬も見えず。唯猿の聲馬の音と共にのぼり來れる女の一群ありけり。どや〳〵とよせ來りて、椽臺もゆらぐばかりに、がたがたと腰を下し、がや〳〵とのゝしりあひあざれあひ、はては姫御前のあられもなや、紅葉は二月の花よりも紅なり、車とゞめてそゞろに愛す楓林の晩などゝ、唐詩を高らかに鳴らすあり。頭髪は皆束髪にて、赤き毛を不作法にまるめたる頭を、縦に横に、上に下に、右に左に、うちふりて狂ふさま、人心地もせず。悪魔の襲ひ來りたる如くおぼえて、取るものも取りあへず、いそぎ崖をにげ下りて、見かへれば、紅葉がくれに猿

とび馬の狂ふかけすでし。さても父もあらむに、母もあらむに、敎の師もあらむに。

山彦

菱花庵の翁

ひとりの農夫の子が、山に遊びにゆき、夕暮になりて歸り來る路すがら、ふと「大寒小寒」と口癖になつて居る言葉を、大聲にて叫びけるに、遙か向うにて、同じく「大寒小寒」といふ聲せり。この少年、誰れが眞似せるならむと思ひて「誰れだ、眞似する奴は」と、大聲にて叫べど、まだ同じく「誰れだ、眞似する奴は」と呼びかへしぬ。是に於て、少年は腹をたて、「人の眞似する馬鹿野郎」といふに、少年は、ます〱腹立ちて「とんちき」と罵れど、「とんちき」と罵りかへし、「ひよッとこ」とからかへど「ひよッとこ」とからかひ、「般若の面」と惡口言へど、また「般若の面」と言ひかへせり。かくの如く、罵り返へされて、少年は、一もはや怺へ得ず、罵る人を捕へて、うちこらさむとて、林の中深くわけ入りて、あまねくさがしたれど、さがし得ざりければ、遂に泣く〱家に歸りて、母にその事訴へけるに、母は笑ひて、こや、太郎よ、よく聞きねかし。汝の口眞似せしは、別に人あるにあらで、山彦といふものなりけり。山彦とは、聲の反響にて、林、山などにこれあり。聲の反響なれど、たゞ、己の言ひし詞をかへすのみにて、他の詞は、ひとつも反響せず。汝ははじめ「大寒小寒」といふ詞を眞似せられたるより、怒りて、惡口のみ云ひければ、山彦もまた惡口ばかり反響せしなり。汝もし惡口言はずして「よい子」とか「利口者」とか譽め詞をいはゞ、山彦も、亦同じ譽め詞を言ひかへさむ。太郎よ、悟れりや。この事はひとり山彦のみならで、世の人の心も、亦一種の山彦にて、われ善行を以て人に對すれば、人も善行を以て

われに酬い、われ惡行を以て人に對すれば、人も惡行を以てわれに酬ゆるものなりと、さとしけるとかや。

こは、翁が年若き頃、獨逸の讀本にて、よみけることなるが、げに、この母のさとしける如く、浮世は山彦なりけり。人を欺き、世をいつはりて、一時よく世に驕るとも、不義の富貴はいかでか長かるべき。遂に人に捨てられ、世に捨てられて果つるなり。老子が、天網恢々、疎にして洩らさずと云ひしは、この事也。之に反して、人に善を施さば、直にはその酬い來らざることあれど、遂には、己れの身も幸あるべし。譬へば嚢中の錐の如し。老子が、積善の家に餘慶ありと云ひしは、此事也。人のさま見て、己れの姿を直せと云へる諺あるが、之れと、多少趣は異なれども、人のわれを厚遇せざる時は、妄りに其人を尤めずして、まづ已れの行の彼を動かすに足るや否やを顧みるべきなり。

わらひ草

柴苅翁

曾呂利新左衛門

文祿年中、朝鮮陣の節、殿下自身渡航の事を度々觸れられしが、遂にその事なかりき。(淺野長政の直諫によりて止みしなり。事は人々の知れる所なれば、爰には云はず。)堺の町人、鞘師曾呂利新左衛門、鞘のかき入れ巧にしてそろりと拔けるとて異名せしなり。

太閤が一石米を買ひかねて
けふもゴトカイあすもゴトカイ

と狂歌をよみたり。

殿下聞召し、新左衛門を召され、汝が落首、よく詠み得たり。併し太閤がとは、不敬ならむ。申開きあるやと、尋ねられければ、曾呂利申すやう、千代に八千代に、さゞれ石の、巖となりて、苔のむすまで、と申す古歌の候が、初め五文字は、何とにて侍りしと申、其

れは君が代にてはなきやと、宣ひけるとき、新左衛門、さればにて候ふ、一天萬乘の帝の御事さへ、君がと申し候、太閤がと申しても、苦しかるまじくやと、申す頓才利口、殿下の意に叶ひ、後には天下に名を殘しけり。

聚樂城、土木功成、諸侯大夫、拜賀の爲め、登營ありしとき、豐太閤、戯れながら、令せらるゝには、今日は新城落成の事なれば、火と申すことを禁ずべし、もし誤りて申す者あらば、百石に付三圓金の過料を納むべきなりと、之に依りて、目付横目付の面々、今日は目付より耳付こそ、肝要なれと、言ひ合ひぬ。されば、終日事なく濟みて、何れも退出、只御相伴衆、御近習の人々のみ、殘られてありし所へ、曾呂利出でて、當日の拜賀を述べ、扨只今登城がけ珍らしき釜を見しと申す、在合ふ人々、如何なる釜にやと、尋ねられければ、木にて造りし釜なりといふ、殿下聞召され、我茶器において天下の名物見ざるはなし。未だ木釜を見ず。さはあれ火にかけては、たまるまじと申されしかば、新左衛門さらばに候、當御城附、十萬石、百石、三兩の割を以て、三千兩拜領仕りたしと申しければ、一統手を打ちて笑はれぬ。折節、幽齋、玄旨法印、傍にて其方、無祿なれば、奉るべき過料なき身にて、三千金賜はらんも、理に叶はず。我が發句せん間、脇をつけよとて、

君のヒをけして人には言はれまじ　　幽齋
御たもと金をそろり頂戴　　新左衛門

學者とわきめくらの爭

ある人、文盲なる者を異見して、世の交りは他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし、といへば、文盲の人は頭をかたむけ、堪忍とは四字にて侍べらずやと、指をもてかぞへ、御許にはればし違ひなるべし、か。ん。に。ん。と四字にて侍る、といへば、異見する人いふ、愚

昧の人かな、堪忍とは、たへ忍のぶとよみて、二字なりといへど、また頭をかたむけ、たへしのぶなれど、又一字ふえたり、五字と成り侍るべし、何と仰せありとも、我等は四字と思ひはべれど、四字にてかんにんはいたしはべるなり、といへるに、其人またいふ、汝がごとき愚昧の文盲は、實に論じがたし、人に似て虫同樣なり、おのれがまゝにすべしと、大にいきどほりけれど、文盲の人笑ひて、何とも仰あるべし、我等は堪忍の四字を知り侍れど、惡口せられても、少しも腹立ち侍べらざるなりとて、笑ひ居しとぞ、其智には及ぶべく、其愚には及ぶべからず。

進喜太郎が僕戈六が事幷に桶屋物語の事

元和初年の頃、幕府の御旗本に、進喜太郎と云ふ人あり。瘡の療治をする事、大名人なり。進が僕に才六といふ者あり。極めておどけものにて、狂言を好み、御旗本中のなぐさみものにて、關ヶ原御陣に、左の腕を鐵炮にて打たれ、手叶ひがたく、用にたゝずといへども、主人喜太郎、不便に思ひて召仕ひけり。後には膏藥を煉ることをればえて、金瘡の療治をするに妙なり。諸人可愛がり、所々へ賴まれて殊の外はやりける、大坂御陣の時、みな〳〵すゝめて、手負の療治をいたさせよとて、連れて登り、わらじを作りて、陣中へ賣り、或は手負の療治をうけとりていたす、はやること斜ならず。ある時才六、例の狂言に、我々軍をするには、金が多く入るといふ、皆聞きて其戯言ををかしがり、其金を以て、いかゞするかと問ふに、才六が曰く、まづ我が軍法をきゝ給へ、其多くの金を以て、紀州に行き、紀州熊野にて蜂と蜜とを多く買ひ取り來て、人數にて持ち運び、樽などへつめさせおき、蜂はふくろに入れ置きて、すはといはむとき、大柄杓數千本にて、彼の蜜を汲みて敵へ打ち掛け、袋の口を解きて、蜂を一時に放ちたらば、あまたの蜂、むらがりて、さし殺

しまたは、さゝれて痛む所を切りて、入るならば、勝利を得んこと疑なしといへば、一座興に入りて、あごをかゝへけるとぞ。

九十九髪

（六）

桂月漁郎

翁は讀みさして、しきりに涙を拭ひけるが、また取りあげて、そここゝ拾ひよみしては、こぼれいづる涙、更にとゞめもあへず。かゝりしほどに、門外に跫音して、人の歸りくるけはひなれば、泣顔見られじと、いそぎて眼をぬぐはむとするに紛れて、讀みし書物は、もとの處に置くの遑なかりけるに、はや入り來れるは、六十路ばかりの媼、みじかく白くのこれる髮をうしろになでつけて、綸子の被布長くしなやかに着こなし、下には貝褄の小紋縮緬つけたる身のさま、いと氣高し。

今日は墓參にとてまゐりたるに、女の足のはか〴〵しからず。いたうおそなはりて、さぞな待ちわびたまひけむ。許させたまへと云へば、いなとよ、いつも參る刻限のさほどさほど過ぎたるにもあらず。たゞ今日は、小春日和のあたゝかさに、心も自からうきたち、面白き話など、うけたまはらむとて、例の刻限より早く參りたるに、御留守ときゝて、少し失望したれど、やがて、かへりたまはむ、出でますとき、來りたまはゞ、あがりてまたるゝやうにとのおことづけなりと、女中の申すに、おなじみの中とて、遠慮もいたさず、お言葉のありしまゝに、おざしきに通りて待ちけるに、はかなしさ覺えたることはあらず、又心の行きたることからずも、面白き筆の御すさび拜見して、今日ばかりもあらず。見そなはせ、さらでも脆き老の目に、涙の自からこぼれいでたる恥かしさよなど云へば、媼は、いたく驚きたるさまにて、さては〳〵、人には見えじ





とて、ひそかにものせし文の、愚痴ばかりつらねたるが、いそぎて出でゆきし途端、秘め置くことを忘れはべりしまゝに、はからずも、御身の目に入りしかとばかりにて、皺ばかりなる顔にこそゆふばへはさゝねど、心にはいとゝはじもみち、自から色にあらはれて、しばし翁の顔と、かたへにある書とを見くらべて、いと耻かしげに袖うち掩ひたるさま、年は老いても、さすがは女なり。

茶まゐらせむとにや、急須取りあげゝるが、つめたくして、湯のなきさまなれば、女中よびて湯を入れさせ、茶飲茶碗には自からつきて、翁の飲むを見て、おのれも少しばかり飲みつゝ、昨日の兼題は、みな詠みたまへりや。歌をよみはじめたまひてより、まだ多くの日もたゝぬに、さても御上達のすみやかさよ。などいふ聲、皺枯れても、何處やらやさらしく、鶯なかせし老木の昔しのばるゝ身のさまなり。

みな詠みて、御添刪願はむとて、まゐりたれど、今日はもはや歌のことなど申すべくもあらず。早く御身につげまゐらすべきひとくだりの物語こそあれ。いざ、しばし聞かせたまへ。

さるにても、如何にかなりたまひけむと御身のしるされたる川田清憲ぬしは、今もなほ無事にておはすなり。學校を出でゝのち、益々立身して、世にときめきけるが、御身が一生處女にて終り給ひしごとく、彼人も亦一生妻をむかへざれば、世の人々怪しみて、そのわけをとへど、思ふよしありとのみにて、更に言はず。終には今辨慶と噂されつゝ、今にいたれるなりと、語り來りて、聲自からうるみつゝ、媼を顧れば、袖を顔にあてゝ打ちふしたり。

やよ、玉子の君、これよりは我身の懺悔話、かへらぬ昔は、水に流し、今のうつゝにおいさらばひしこの老の身、如何やうにもさいなみ給ひて、ありし昔の罪は

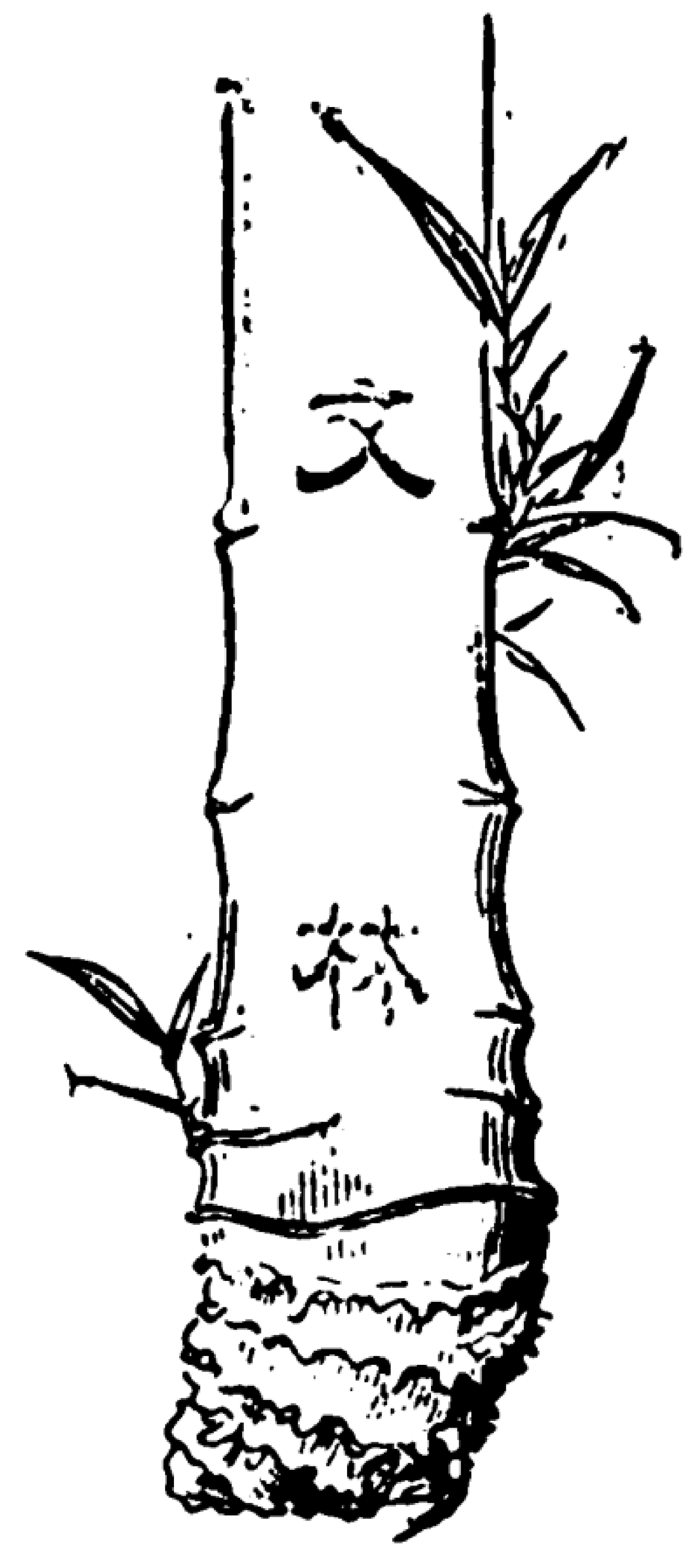
許させたまへ。あはれ、かくまでに清淨無垢にして、つゆくらき處なき佳人をして、むなしく深山の花と散らしめ、また世にたゞしく、道德堅固なる才子を一生男やもめに蟲をわかさしめしものは、誰の罪にもあらず。みなこのやつがれが身の過なり。

今は本姓にたちかへりて本山正春と申せど、御身も心づきたまはざるべけれど、もとは、北村正春と申せし身の上なりと云へど、媼はひときは打沈むならむと思の外、頭をもたげて涙をはらひ、さては、御身が北村正春にておはしけるか。いたづらにものせし文、御目にとまりて、御心をなやますこと、いと罪ふかし。許させたまへや。何事も御身の運命のつたなきにて、つゆ御身の罪にはあらぬものをといふに、清き心の底もくまれて、尊しとも尊し。

神ならぬ身の、我もむかしは一時、御身と川田とをうたがひたることのはづかしさよ。思へど、そのかみ、川田の學友にて、なぞ〳〵我家にも來りし加藤文之助といふ人の言葉に、あざむかれたることの口惜しさ。のちにいたりてはじめて悟りぬ。今更かたるも、けがらはし。たゞ一言にて、そのあらましをいへど、われに一人の姪ありて、いとけなき時より育てしが、いつしか川田に思かけて、つけぶみなどしけれど、川田はもとより堅き身なれど、つゆ取りあはでありけるを、彼の加藤もとより我姪に思をかけゝるに、かくと知りて、戀路の邪魔とて、己れが親友に濡衣きせし心のきたなさよ。されど、加藤も生來の惡人にはあらず、かかることをなせしは、みな戀といふ魔物のなせしわざなりけり。

その時は川田、御身と關係をたちて、我にあやまりけるに、我もその平生の行にめでゝ、許しけるが、のち我が過を知るにいたりて、反て我より川田にあやまり、もとの約束のまゝにせよといひたれど、男にも似合は

ず、かゝる未練なこと言ひたまふとて、從はず、口には實にかく言へど、あはれや、その身は一生男やもめにすごしたるなり。
我も強ひ由なくて、今にいたりけるが、川田は、つゆ我を恨みず、昔の一飯の恩をわすれじとや、今もなほ、我退隱せる此片田舍にまで、たび／＼おとづれ來るなり、とかたる折しも、ドンと一發、鐵砲の音ひゞきて、榎の上に鳴き居りし一羽の鵯鳥、庭にひらりとおち來れり。二人はおどろきて、庭の面をみかへる折しも、下女に伴はれて庭先に來れる一人の老人は、うちし鐵砲のあるじならむ。嫗と顏みあはせて、いぶかしと思ふ氣色の見えけるが、忽ち翁と顏見合せて、さてはこゝにおはしたるか、今日ひねもすかりくらし、いさゝか鳥を獲たれど、御身と共に一の鍋に對して、こゝろよき御話しうけたまはらむとてまゐりたるに、例の歌の先生處ゆかれたりとの事なれど、日はまだ高し、今二三羽うち添へむとて、こゝまでまゐりたるに、ゆくりなくも、こゝにて御身に對面したる不思議さよと云へど、以前の翁は打笑みて、不思議と云へど、それに止まらず、昔の紅顏は、今の白髮とかはりたれど、川田ぬしよ、御身は猶覺えあらむ。又玉子ぬしも、忘れたまふべくもあらざる面影なるべし。かく三人が、こゝに落ち合ひしは、不思議の中の不思議にて、まるで小說にありさうな話しなり。まづ／＼こゝにあがりたまへとて、座敷に請じて、「飛鳥川」のこと、さては今迄うはさせしことまで、つぶらに打語り、今は共に色も香もなき老木の身の、結婚などは、おぼさるべけれど、せめて此身の罪ほろぼし、御兩人、何事も我にまかせたまへ、思ひたつ日を黃道吉日、媒人は此身の役、久しく閒きもせざりしが、まだ忘れては居るまじ。いでや、高砂や、この浦風に帆をあげて、月もろともに入るしほの／＼、それから後は、よし／＼、めでたやめでたや。（終）



山影寫水　松浦詮

三芳野のなつみの川のかはよどは
やまのかげさへしづけかり鳬

山路落葉　池田茂政

きのふけふ吹やあらしに木葉ふり
たどる山路のみちまどふかな

羇中山　前田利嗣

あまさかる鄙のたび寢に日數へて
山みちをのみゆくぞわびしき

月滿林間　諏訪忠元

むらがらす寢ぐらしめたる林にも
ひかりあまりてみゆる月かげ

依月人來　同

浮雲もかゝらぬつきにかたりあふ
こゝろくまなき人はとひきぬ

冬旅　長谷信成

をり〳〵は時雨の雨にとめられて
いそぐ旅路のはかどらぬかな

冬鶴　宮地嚴夫

冬がれし蘆まにゐてもなにとなく
ゆたかに見ゆる鶴のひとむら

霜夜月　阪正臣

月影をさむしと見れどにはの面に
まことの霜もおく夜なりけり

月前船　三浦千春

夜もすがら月にうかれてこぐ船は
あくる空こそとまりなりけれ

曉鹿　同

ひかし山あかつきあらし西ふけば
みやこに近くしかの音ぞする

逗子にて　大畑弘國

江の島の浪にうかべるこゝちして
月もしろきあきの夜半かな

同　同

江の島の沖ゆくふねは世のなかを
こぎはなれたる心地こそすれ

暮秋雨　林　甕臣

そぼち降る一雨ごとにあさなく〳〵
寒くもあきは成りまさりつゝ

深夜雁　同

もの思ふと寝られぬ臥房の燈火を
いくかゝげしつ雁がねのこゑ

高山月　宇野豊道

山のはをろらにのこしてむら雲の
たなびくうへに月ぞすみける

浦邊月　同

おしてるや難波の浦にすみわたる
かげさへみつる秋の夜のつき

鎌倉紀行の中に　龜谷行

秋かせは悲しきものとしりながら
わきて身にしむかまくらの里

暮秋月　井上頼文

ゆふべゆふべ軒端に出ゝ見し月の
身にしむばかり秋ふけにけり

山名氏清夫人　佐々豊水

生死のさかひさとりてみちしばの
霜いさぎよくきえしをゝしさ

遠山雪　永石徳文

秩父嶺はいたゞき白くなりにけり
よべの時雨やゆきとふりけん

冬田家　　鍋島榮子

刈つみしいな穂かけほし賤がやの
軒端にきはふふゆはきにけり

山家爐火　　島津輯子

ゆきにとふみちもなきまて埋火の
うつもれてすむ山のしたいは

翠松　　蜂須賀隨子

はな紅葉時につけたるいろよりも
ろの玄なたかく見ゆる松かな

冬眺望　　前田朗子

あしびきの山かせさむき朝な朝な
松のはしろくれけるしもかな

山路落葉　　松平健子

踏わけて山路をゆけどちりしける
木のはにかわく聲はありけり

秋晴　　仝

秋風もろよとおとしてこゝちよく
はれわたりたる朝日かげかな

海邊霧　　下田歌子

磯山のまつにひとむらのこりけり
あさ日にきえし波のうききり

森寒草　　柳原愛子

片岡のもりのれちむをかきやれむ
まだ霜かれぬくさもありけり

岡落葉　　小池道子

もみぢ葉はさろひつくして松風の
音のみさむしおかごえのみち

夜落葉　　日野西廣子

さよ時雨ふる音はしていたまより
もらぬは木々の落葉なるらん

落葉深　　鶴久子

かきよせてたくひともなき我岡の

落葉はやまとなりにけるかな

海邊秋風　同

沖つなみよせてはかへる聲すみて
うらの松むらあきかせぞふく

森時雨　中島歌子

紅葉せし森のしたみちあかねさす
日かさの上にふるしぐれかな

暮秋虫　同

朝日さす野川のつゝみこほろぎの
なく聲さむくあきふけにけり

紅葉誰家　田邊和氣子

木がくれて住人からはしらねども
とはまくほしき軒のもみぢ葉

行路虫　内田遊歌子

馬れひにくつわむしさへ聲そへて
あきの野みちのいさましき哉

海邊眺望　彦坂尋子

あかしがた浪靜かなるうなはらに
見る目はるけき沖のつりふね

山家暮秋　林甕臣

「ケヽヽッケエチイーく」と、耳にさしあてたる聲に窻おしあけて、見いだせど霧わたる片山ぎしの柞原に百舌鳥の、啼くなりけり。日も、はや影うすく西ざまに、かたぶき果てゝ、風に搖れうごく尾花がすゑに蔭ろひたる、言はんかた無しや。

あはたゞしく鳴くや外山の百舌鳥のねの
いと疾く秋の日は暮れんとす

日も暮れぬ秋は果てにも成りにけり
百舌鳥の鳴くこゑ夕風の音

野菊

壚井ふく子

木の葉も露ももろき此ころの空、何となう身にしみ、心の自からしをれて、ひとりうちわびけるに、父上が植ゑさせたまひたる玉菊を見そなはさずや、この朝げ玉の光りのいやまさりぬる事よなど、妹のそゝのかすに、さらばとて、もろともに、庭におり立ちて詠むれば、黄菊白菊うちまじりて、いとよく咲きたり。秋陽に誇るといひけむ花の操もいとしるく、色も香も袖にあまりぬるに、心づくしの秋のかなしさも忘られて、こをつくられたる父君の御心のいとなつかしく、げに千代も生きのびむ心地して、たゝずむほどに、あな朝霧のふかくもたちかくす事よ、彼處には如何なる人のこもりてならむ、つれさせたまへとて、我が袖を引くまゝに、知らず〳〵彼方なる野邊に出でぬ。いつも見る尾花の本にてありけるものを、何とてかくはへだゝりしぞといふに、其くちたる袂をつゝまむとて、かくはへだつるにやあらむなどつぶやきつゝ、ふと見れば、足のもとに、咲き亂れたる花あり。すゝきもはぎも枯れ行くこの野に、ひとりとゞまりて、匂ふは何の花ぞ。むらさきには薄きやうなれど、何れゆかりのものにやあらん。いで〳〵もろともに來よ、我庭に移さむなどいひつゝ引きぬきて、歸りけるに、父君はよきものをもてこしよとて、ほゝゑまれながら、すぐに玉菊とならべて植ゑさせたまひぬ。二人りはいとゞ甲斐ある心地して、色も香もうすくはあれど、紫のゆかりのなつかしさにと、ほこりがに云へば、父君はゑましうちまもり玉ひて、いましたちは、未だ此の花を知らずや。このよめなの花にて、野ぎくといふは、このことなりと云はれけるに、さては野菊と云ふものにて、春の野によめなど呼ぶものにてありけるか。さるにても、此菜の若菜なる頃、あつものゝつまとなるべきに、如何なれば、秋におくれて、ひとり咲くらむぞ、れもはる

あはれや。

都に上れる記　永石徳文

いかにかしたまひけん、都なる師の大人、このごろ心地つねならず、打ちふしたまふときゝはべりて、心も心ならず、夜のあくるをまちて、さて明日なん出たゝんとす』。三月の廿四日の日、つとめて布施の里を立て、都路にかゝる。けさは野山のかすみはれやらず、遂にあめとなりぬ。車ながら鳴鹿の浦の磯部をつたひ、御宿、部原、澤倉をへて、七時むかり、勝浦にいたる。このみなとよりは日毎に滊船都に行通ふ。さるは南の方、安房の國をめぐりて、武藏の内海に入るなりけり、さてけさの船は出つといふに、口をしくて、一文字屋といふにやどりて、明日の船出をまつ。いと心もとなし。』午の時少し過ぐるころ雨なほやまずふるに、この里にすめる桐川、久我、おなじき某ぬしも訪ひきぬ、この人々は去し年ごろ都にありしほど、知りそめて、中垣のへだてもなく、交らひし友だちなり、なにくれと、昔今の物がたりして、さて日くれて、なほ幸前といふに至りて酒などくみかはす、おのれものとより酒を嗜ず、はた魚をさへ好ねど、かゝる折々にはいと心ぐるし。さるほどにこの里の町會議員なりとて、廿人あまりの人々來合せて、まとゐしてのゝじるほどに、夜はふけぬ。かゝる間も都のことのみ覺えて心やすからず。

二十五日、くもれり。けふさはることありて、船出でずといふ。さていつまでか、あるべくもあらねど、今は安房の國かけて陸路より上りなんとす、かくては西の方下總路よりすべかりしを、今はいかにせん。速浪、串濱、松部、鵜原、守屋、などいふ里々、たゞ浪打つ岸をのみぞ傳ふ、さて興津といふ港舟多くつどひたり、こゝと勝浦との二みなとは、東上總にてはやゝ

きこえたる港になん、しむしゆきて、安房の國の境に入り、小港といふところをすぐ、この港興津につぐ、この里僧日蓮の生れしところとて、今も誕生寺といふ寺立てり。このわたり名どころ多かりときゝつれど、心いろがれて甲悲なし。このほとりにて里人君塚某にあふ。この人學校の教員なるが、公のいとま賜りて、安房の國めぐりして、今かへるさなりといふ。内浦、天津のあはひの隧道、長さ百二十間ありとなんいふ。凡安房、上總は山々たゝなはれゝど、さがしき坂路のみ多かりけんを、大御代のみめぐみに、かゝる片隅にまで及して、今は馬、車も安らかになん通ふなる。天津は家居立並みて、いとにきはゝし。濱荻といふ里み渡しいとよし、なるかの浦よりはじめて、このわたりまで、かぎりなき大海原をみわたし、浪打つきしは、山のさき〳〵半くづれて、けづれるが如くなるさま、けしきいふむかりなきを、このわたり更にをかし。はるかに前原、磯村、波太などの里々も見ゆ、むかし源頼朝の郷、石橋山の戰やぶれて、安房の白濱にのがれきて、しむし身を隱しゝといふなる島もほのかにみゆ。白濱はなほこの濱づたひなるべし。かくてこの郷この島を出立て、わが上總をへて、下總の千葉に出でたまひけん、我古郷のわたりにも、その跡なりといひ傳へたる所多かり。かの上總の介平廣常が居城のあと、さては要害の城あとなども、我里にのこれり。』さてこゝよりは海原を背がひにみて、山路になん入る。さるは保田といふところをさして、安房の國を横ざまにこゆるなりけり。聖人塚、和泉の里々をへ、田原坂東といふ所にて、晝食給ぶ。花輪、吉尾、大山、何れも、山のあはひの里なり。ふもとの麥生あをみわたり、菜の花さきつゞき、桃櫻も所々さき出でたり。左手なる丘を峯岡の牧といふ、實に馬牛など群りてあさりくさまをかし。小塚といふ程に、日やまの端近うなりぬ。され

ど今宵は必ず保田の浦に出づべしと、定めつれど、なは車をいそがせて、駒山、市原などをへて、横根の峠も今はたゞ安らかにこえぬ。夜の八時ばかりにつきて、吉田屋といふにやどる。この宿、海原もみえていとよし、こよひ月いとおもしろきに、

よる波も花とみねつゝのどかにも
磯やまゝつにかすむつきかな　（未完）

（前號五十五丁、下段、三行、中村の上、小を脱す、同五行、消ねにし霧は、露の誤）

十二月兼題

五日
歌……氷始結
文……静の前の事を記す

廿日
歌……梅花先春
文……歳暮

雜報

●勅語及令旨　臺灣匪徒平定せしときこしめして、畏くも兩陛下より、樺山總督へ、勅語並に令旨を賜ひ、十月二十八日、午後六時四十五分發、電報を以て、之を傳達せらる。

勅語

其部下南進軍百難ヲ排シ速ニ臺南ノ賊徒ヲ掃蕩ス朕之ヲ嘉ス卿宜シク其後ヲ善クシ以テ全島ノ平定ヲ完クスベシ

令旨

臺灣副總督ノ統率スル南進軍臺南ノ賊徒ヲ掃蕩シタル趣　皇后陛下聞食サレ御滿足ニ思召サルヽ旨御沙汰アラセラレタリ

北臺に在る角田少將は、樺山總督の命を受けて、小松參謀總長殿下へ宛て、十一月五日、午前北臺發の電報を以て、奉答せり。

左の通り、臺南樺山總督より殿下へ電報すべき旨、申來れり。

臺灣の賊徒掃蕩したるに因り優渥なる勅語を賜ふ臣等恐懼の至に堪へず臣資紀善後の策を講じ聖旨に奉對せん事を期す謹で奉答す

右御執奏を請ふ、尙左の件、　皇后陛下へ御執奏を請ふ。

南進軍臺南の賊徒を掃蕩したるに因り優渥なる令旨を賜ふ臣等恐懼の至に堪へず謹み奉答す

●又　日本赤十字社へも、勅語及令旨を下したまはせられたり。

勅語

明治二十七八年ノ戰役ニ於テ軍衙衛生部ノ事業ヲ助ケ能ク其本分ヲ盡ス　朕深ク之ヲ嘉賞ス

令旨

明治二十七八年ノ戰役ニ於テ同心協力彼我ノ諸患者ヲ救護シ軍隊衛生ノ事業ヲ助ケ能ク博愛ノ實ヲ擧ケタルヲ喜ブ

●御床拂　皇太子殿下には、曩に御違例に在らせられしが、御快方に赴かせられしを以て、去日御床拂あらせられたり。

●東宮殿下の行啓　皇太子殿下には、御病氣旣に御平癒あらせられしに付、今二十日相州葉山御用邸に、行啓、來年四月迄、御滯留遊さるゝ由に承はる。

●皇太子殿下の御銅像　美術意匠家井上宜文氏は、皇太子殿下御乘馬の御銅像を製し奉らんとて、彫刻家小倉惣一郎氏に依托し、昨年一月より之に着手し、粘土を蠟型に移し、夫より井上氏の工場に於て、鑄銅に取掛りしが、此程漸く鑄造出來上り、目下之が色付け

中にて、來月初旬には宮内省へ献納する筈なりといふ、御像は大さ馬とも一尺三寸、陸軍中尉の御服装にて、其御乘馬は前の左足を上げ後の右足をつま立て居る御像なり。彫刻中は東宮侍從の人々等、事を指揮されしてとゝて、寫眞も及ばぬほどの出來なりといふ。

●御見舞品　さきごろ特派大使井上伯につけて、我皇室より朝鮮國王陛下へ御見舞品の御贈呈あらせられしやに承りぬ。

天皇陛下より　料紙硯箱　一組

皇后陛下より　書棚　一臺

右大君主陛下へ

皇太子殿下より　手箱　一個

右王太子殿下へ

朝鮮國王陛下は、一方ならぬ御機嫌にて在せしと。

●宮中の御造花　近頃、共立女子職業學校造花科へ紫万年靑、及蘇鐵等の造花を御注文ありしよし。

●北白川宮殿下薨御　前近衛師團長、陸軍大將、功三級、大勳位、故北白川宮能久親王殿下は、本月五日終に薨御あらせられ、十一日國葬を以て御葬儀を營ませらる。

あはれ、竹の園生におはしましながら、御身には御劍をとりはかせ給ひて、はやくより御軍のことにかゝづらひおはしまして、こたびは又おほき大御言をうけ給ひて遠く大洋をこえて、臺灣にわたらせ給ひ、こゝらの艱苦をあぢはゝせたまひながら、賊徒勦滅に御力をつくさせおはしましゝかど、御功あらはれて、今は平定に赴きぬるに、ふとみいたづきにかゝらせ給ひて、遂にはかなくかくれさせ給ふ、雲の上は申すもかしこし、僻村陬邑にいたるまでに、おいとなくわかきとなく、誰かはかなしみ奉らざらんや。かずならぬ身も、たゞなみだせきあへずなん。

●皇太子殿下の御墓參　皇太子殿下には、去し十二

日午前、芝濱の離宮を御出邸、近衛歩兵大尉の正裝をなし給ひ、音羽なる故能久親王殿下の御墓へ御參詣遊ばされたり。御歸途を拜し奉るに、御容姿御病後の事故、多少御衰弱の御樣子なれども、御附の武官と活潑に御談話し給へるを見上げ奉れり。

●勝老伯の哀悼　老伯は病床ながら哀悼を表して、左の詠をなせりとぞ。

北白川の宮のかくれさせ給ひし時　安芳

いともをしいともはかなし吹すさむ
つねなき風のいともうらめし

またみいさを丶思ふ

去ら鳥の御神に繼ぎしいさをしを
いくさの君にけふみつるかな

●臺灣に北白川神社を建てんとの說　やごとなき御身を以て、近衛師團長とならせられ、親ら將士を統べて、臺灣に向ひ、露に宿ね、石に枕して、士卒と甘苦を同うしたまひて、土匪掃殄の大任を全ふし、凱旋の期方に近きにあらんとして、畏れ多くも病を得させられ、御歸京の後、薨去したまひける、故北白川宮殿下の御事を思へば、誰か、其武勳の彌高きを仰ぎ、其忠精の彌厚きに泣かざらん。されば殿下の功積を千載に傳へて、九泉の御靈を慰め奉らんとするは、是實に臣子の衷情とこそいふべけれ。佐賀人某議を成して曰く、臺灣新たに我皇土と爲し上は、宮殿下の御功績を永く臺灣に留めまつらむ爲、殿下の御靈を同島に祭り、北白川神社、或は其他相應はしき社號を奉りて、一の神社を建て之を官幣大社に列して、年々祭祀を行はゞ、同島に住む臣民は同神社をもて、其守護神とも仰ぎ奉るに至るべけれぞとの主旨なりと、適當き考案といふべし。

●御菓子の下賜　貴族院議員村田保氏の令室、貞子

死去の事を聞召され　天皇皇后兩陛下より、御菓子御下賜相成しに付、土方宮内大臣は此旨書面に認め御菓子と共に全邸に差贈られしといふ。

●臺灣の語學教授　臺灣總督府、學務部長伊澤修二氏は、教育上、其筋へ稟議すべき用務を帯びて、此程歸朝したり臺灣には將來中小學校を設置し、教育の普及を圖る計畫のよしにて、今回は土人に本邦語を教授する教員、五十名及び臺灣土語研究生百名を募集し本月中に志願者を檢定し、氏は合格者を引率して、再び渡臺するよし。而して右の中日本語教員は、臺北府に於て、三ケ月間授業方法の傳習を爲したる上、各地に分配して、教員の任に當らしめ、又研究生は同じく同府に於て、八ケ月間土語の教授を受け、卒業の上は各地方官吏に任用する筈なりと、今其應募資格及び給料等の事項を聞くに、日本語教員は(一)高等小學校教員の資格を有する者、(年齢に制限なし)にして、相當管理者の證明あるもの、(二)給料は檢定の結果に依て決すべきも、目下内地にて本職中の給料以上を支給する事とし、又土語研究生は、(一)尋常中學校第二級以上、若くは相當の學力を有し、且つ同校長の證明ありて、年齢十八歳以上、二十五歳以下に限る、(二)給料は卒業の上二十圓以上を支給し、研究生中は同額以下を給す、等にして、衣食住は何れも公費を以て支辨し而して軍制組織の間は、各五分二の加俸ある筈なりと云ふ。

●華族女學校開校紀念式　本月十三日は、華族女學校の第十周、開校の當日なりしを以て紀念式を擧行し、職員、生徒一同は午前九時より參院し、同時卅分正堂に整列して、兩陛下の御眞影を拜し、次て勅語捧讀、幷に講話あり、次に生徒の祝辭幼雅園幼兒の奉拜等終りて、同十時過ぎ退散せりと云ふ。

●女子高等師範學校入學許可　本年九月臨時募集の

假入學生五人を選拔し、本月一日本入學を許可せり。
其府縣別は、
東京府二人　兵庫縣一人　新潟縣一人
佐賀縣一人

●縣知事の照會　某縣知事より、女子高等師範學校生徒資格に關する件に付、普通學務局長宛、照會ありしかど、左の如く回答ありきとぞ。

明治二十七年文部省令第二十五號女子高等師範學校規程第五條第三年齡の制限は薦擧の際該年齡の範圍内に在るものを指す義なる樣被認候も或は翌年四月入校せしめらるべき時期に於て範圍内に在るべきものは薦擧候も差支なき樣にも被存疑義に涉り候條何分の御指示相成度此段及御照會候也

追て本文疑義は至急御回答を得度義付電報にて御指示成度此段申添候也

右回答（電報）

女子高等師範學校規程第五條第三年齡の件は後段御見解の通にて差支なし

●矢野梅子の消息文　げにおだやかにまめ〱しくて、心ぞへのほどもはた日頃の教訓のほどもおぼえて、おひさきいとたのもしうなん。

此は京橋區、築地南小田原町なる、東京府高等女學校の教諭、明石よし子氏が、先比病氣にて、引きこもり居られしをり、同校二年級生徒なる矢野うめ子日下○○子の兩人より見舞のため送り來し消息文なる由なるが、文体といひ、書体といひ、學級に合せては、いとめでたく覺えたれどよし子氏に乞ひ得て、その寫しを寄せまゐらするになん。

雪の舍主人

東京府高等女學校二年生　矢野梅子作

つたなき筆をもかへり見ず、文して申上まゐらせ候、師の君には、さいつ頃よりなやみわたりたまへるよし、はじめがほどは、さしたる御事とも承り候はざりしが、出でたまはぬも、はや十日あまりとなりつれど、待ちわび參らする身には、中々に千秋のおもひに御座候、わきてつね〱御をしへかうふる家政、動物の時間にはなにとなう心ちよからで、失禮なが

ら御あんじ申上まゐらせ候、されど深きねやの中にとぢこもりれはします御身には、いかにつれ〳〵に此の長夜をあかしたまふらん、御病氣の御ありさま、御心ちは如何に候ふか、伺ひ上げまゐらせ候、何卒御やしなひ遊ざされ、一日も早う、學びの庭に出でたまひて、ふかきめぐみの露　ろ丶ぎたまはん事を、ひたすらはねぎ上け侍るになん、

あなかしこ、

●彦根町立高等女學校の生徒學術會習演會のことは前に記しつるがこのごろ更にくはしくかきれこされつれぞまづ。

本會は專ら生徒の自治に任せ、生徒の趣向さ、力量さに應じ、平素學習の藝術を練習せしめ、言語動作をして一層優美に、高尙に趣かしむるを主さし、傍ら同校さ家庭さの、關係を親密にし、彼我互ひに氣脈を通せしめん爲め學事に關係の、諸氏、生徒父母保證人等へも、それ〴〵招狀を送られたれば、當日の來賓は、犬上郡長を始め、郡書記、彦根町長、助役、役塲書記、學務委員、町會議員、尋常中學校職員、尋常高等小學校職員、其他公職に關係ある諸氏、生徒の父母、保證人、兄弟姉妹、親戚等に係る紳士貴婦人、令孃、二百餘名にして、同校講堂も、殆んど立錐の餘地なき程なりき。さて左の順序に由り、一同着席、敬禮畢るや、甫守同校長は、當日來賓の臨席を謝し、同時に生徒父母保證人に對し、同校の敎育主義幷に學校さ家庭さの關係に付き　用ゐ三十分間、教育上有益なる演説あり次に生徒總代、中川繁野子氏、歡迎の辭を述べられ、生徒　君が代齋唱ありをはりて引續き、生徒學術演習を始め、同三時少憩の上、再び開會し、續々演習せり、終に活潑に充たされたる、正氣の歌を一同合唱し、畢りて北村㡳子氏閉會の辭を述べ、併せて來賓一同の厚意を謝し、全く會を終へしは同六時すぎなりき。偖此日演習の生徒は、各級漏なく行渡り、就中本科一學年生の如きは、幼齡のものありしが、來賓數百名列席の會塲に、少しも臆する色なく、高き演臺に登り、いさ明晰にいさ活潑に無邪氣に、讀料及ひ自作文の朗讀、談話問答抔、各自の表題に付き、巧みに演習せり、十五六才の生徒は、稍高尙なる學術的、理論、演説、問答、等各級に應じ、夫れ〳〵劣りなく、女學生たるに耻ぢさる題目、組立、趣向、材料、等を工夫撰擇、採取せり、各生演習の際は、來賓耳を傾けて、注視せしのみならず、生徒の擧動言語等誠に淑女たるは耻ぢず、いさ優美に、いさ奥床かしく見ゆければ、各演習每に、拍手喝采の聲を漏らし、五時間のながきに渡るも、來賓一同は毫も厭倦の模樣なく、終始愉快の色をあらはし、熱心に各生徒の演習に注意したり、中にも演習する當該生徒の父母、兄姉の如きは、一層喜悅の狀を以て、注目し此後我子女をして長く學事に勉勵せしめんさの、感を惹起さしめたる如く見受けられたり、現に生徒の父母兄姉は休憩の際、敎員に對し、誠實に日頃の厚意に謝せしものさへありて、實豫想外の盛會にて來賓は後日の演習會に再び來觀せんことを期し、退散せられたり

生徒學術演習會順序

第一　一同着席

第二　開始

一　一同敬禮
二　本校教育主義並に家庭と學校との關係に於ける學校長の談話
第三　學術演習
一　歡迎の辭　生徒總代　中川繁野
二　君が代齊唱二回　一同起立
三　橘逸勢女の話　本科三學年　花木ずま
四　臺灣島（演說）　本科四學年　林田久尾
五　柿と栗（寓言）　本科二學年　飯沼よしに
六　空氣の壓力（演說）　本科五學年　富永たか
七　山内一豐（朗讀評議）　本科一學年イ組　橘きやう
八　身体と食物との關係（演說）　本科六學年　小川すて
九　水車（自作文）　本科五學年　三居たま幾
十　裁方（縮緬一尺七寸巾のものにて女羽織）　技藝專修科二學年　吉川ぎん
十一　ひらめの話　本科二學年　藤田すて
十二　唱歌（友どち來たれ）　本科一學年イ組　門根さみ
本科一學年イ組（唱歌）　夏川たみ
補習學科樂器　北村辰
十三　文章（自作書簡文）　本科一學年ロ組　高畑そよ
仝　返事　本科一學年ニ組　中村品尾
十四　貯蓄の必要を論ず　本科四學年　桐畑かれ
十五　孑孒の變体（談話）　本科一學年ロ組　金田ふみ
十六　春日局の話　本科三學年　奥居ぎん
十七　育兒法（談話）　本科六學年　北川やす
十八　砂糖の由來（演說）　技藝專修科二學年　原よそ

十九　鍛錬的智識的兩派の教育說に付き（問答演說）　補習學科　中川繁野
補習學科　北村辰
二十　烏と狐（寓言）　本科一學年イ組　宮田繁尾
（此間暫時休憩）
二十一　縫方（但し重掛）　技藝專修科二學年　川島志ん
二十二　婦人は看病法を學ばざるべからざることを論ず　本科四學年　松本芳千代
二十三　猫と猿（寓言）　本科三學年　高木ふさ
二十四　婦人の勇氣（自作文）　本科六學年　外村よしに
二十五　看病の方法（說明）　本科五學年　上野京
二十六　塵積りて山となる（談話）　本科二學年　中野しげ
二十七　唱歌（近江八景）　本科一學年ロ組　谷口ふさ
補習學科樂器　中川繁野
二十八　紫式部の話　本科一學年イ組　杉浦かつ
二十九　羽衣（朗讀）　本科五學年　西澤末尾
本科五學年　上田あい
三十　堪忍の話　本科二學年　水野さみ
三十一　文章（自作記事文）　本科四學年　中島みつ
三十二　石炭の說明　本科四學年　長山てる
三十三　唱歌（白蓮白菊）　本科三學年　林田みつ
本科三學年（唱歌）　勝見文代
補習學科樂器　中川繁野
三十四　日記及簿記必要（演說）　本科五學年　高橋よし留

三十五　衛生(演説)　本科五學年　宮村つる
三十六　おしろい(問答)　本科一學年ロ組　松山しけの
本科一學年ロ組　朝比奈さし
三十七　忠度の都落(朗讀)　本科六學年　宇治原すゑ
三十八　毬付(本身の袖)　技藝專修科一學年　大杉ゑい
三十九　唱歌(庭の教)　本科二學年　中村さも
四十　文章(自作記事文)　補習學科樂器　北村辰
四十一　田舍と都會(問答)　本科五學年　上野京
本科五學年　石北よし
四十二　唱歌正氣の歌　生徒一同
四十三　閉會の辭　生徒總代　北村す
第四　學校長の談話
第五　一同敬禮
第六　閉場

●日本人享年の平均　全國人口、四千二百餘萬中、年々毎に死亡者の年齢を積算して、之を其死亡者の總數にて割出したる、本邦人享年の平均に付き、内務省の調査に據れば、去る明治二十年より同二十四年に至るまで、五ヶ年間の平均を見るに、左の如し。

二十年　三十七年七分九厘、二十一年　三十六年六分四厘、二十二年　三十五年七分、二十三年　三十六年九分四厘、二十四年　三十七年一分四厘
(右五ヶ年間平均)　三十六年八分四厘

●孝婦へ賞金下賜　三浦東京郡知事より、去る十二日孝婦青木トメへ、左の如く賞金を下賜されたりと、

府下荏原郡六鄕村大字八幡塚
千四百三十八番地平民
青木トメ

資性温和にして父母に孝十七父を喪ふ明年母哀毀心風に罹り起居常ならず身亦耳を病み聾となり加ふるに生計窮厄し不孝頓に一家に集まるも克く其艱苦に堪へ誠を母の看護に盡くし一意承歡茲に三十有餘年初媒して夫を迎ふ其夫遊惰放逸家産却て之が爲めに蕩盡するも敢て怨色なく夫出で丶後隣保之を憐み勸むるに後夫を迎ふるを以てするも貞順節を守り固辭して之を肯せず其志操の堅孝養の厚洵に寄特とす依て爲其賞金七圓下賜す

明治二十八年十一月十二日
東京府知事從三位勳二等　三浦安

教の庭

十一月廿日　兼題寒草帶霜　（天地人の外は原稿到着順なり）

天　大坂市東區廣小路町番外三番屋敷　佐治ふさ子

うちまねく力なけにも見ゆるかな
尾花のそてのしものおもさに

地　下總佐倉　植木鋼子

多かれと思ひし野へのくさの上に
けさはつしもの花ろ咲きけり

人　播磨龍野　眞鍋直子

かれわたる庭のち草をけさみれは
ひとついろなる霜ろにほへる

丸山須磨子

秋の野にいろあらそひし八千くさも
ひとつにしろし今朝のはつしも

鈴木美惠子

枯れはてゝいろなき野邊の八千種も
しもにふたゝひはなさきにけり

牧野幸子

風たえてそよともいはぬかれをきの
うは葉おもけにおけるあさしも

牧野稍子

鈴むしのなきからしてしあさ茅生に
はなさみるまでしもはおきけり

住山幾子

八千草もひとついろにそふゆかれて
たゝはつしものはなそさきける

高井孟子

見し秋はつゆのゆかりのいろもなし
しもかれはつるのゝへのゝくさ

永井さい子

みし秋のいろはかれ野のかれはてゝ
しものはなのみさかりなりけり

佐々有鄰子

かれはてしのへのなてしこ女郎花
しものしらかさなりにけるかな

小野田のふ子

みたれつる枯のゝのすゑにしもさねて
あらしをむすふいさすゝきかな

春野家昌子

花かさもうたかはれけりかれくさの
うへにおきそふ今朝のはつしも

工藤しゆん子

見わたせば荻もすゝきもかれはてゝ
おくしもしろくなりにけるかな

降田槇子

枯れ残る尾はなかそてもやれはてゝ
しもさへしろくむすびけるかな

靜間密子

冬かれのくさ葉にさゆるつきかけさ
見ねしはしものおけるなりけり

堀谷よし子

八千種ににほひしの邊もかれはてゝ
小くさのうへにしもそ置きそふ

堀谷よしね子

さなきだにさびしき庭を今朝見れば
かれふすくさにしも置にけり

薗谷やゑ子

中〱にさびしきそらさなりにけり

枯れし小くさにしもは置きつゝ

枯れ果てゝあはれに殘るわかやさの
にはのなくさにしもおきにけり　堀谷やな子

冬かれの千くさのうへにおくしもの
きゐぬかきりははなとみゆらむ　松原保子

枯れはてし尾花かうへにしもおきて
うつらのとこやさむけかるらむ　大津千枝子

枯れのころみかきか原のはなずゝき
まれくたもとにしもそむすへる　近山まつ子

冬かれの野邊の千くさにしも置きて
いろあらそひしあさたにもなし　岡崎たか子

しも白きあたのおほ野のかれ尾はな
まれきもやらすかせにみたるゝ　松本みち子

さらてたにさひしきものをかれ萩の
しもにしをれて今朝は見ゆなり　國武須磨子

霜おふるかれ野のすゝきかせ吹けは
野邊にしられぬなみそたちける　小幡千代子

冬の野にあきの千くさのこれりと
見しはかゝれるしものはつはな　小幡富美代子

なすゝきのかれふの中をわけゆけは
わらしもしもにむすほゝれけり　山田ゑい子

なみなへし移ろひ果てしいろなから
しものしたにもあきはのこれり　津田錄子

かれわたる野邊の八千草けさ見れは
しものはなのみさかりなりけり　勝部しう子

今朝見れはのこれるあきの色もなく
にはのちくさにしもおきにけり　河田いし子

庭のおもに落葉かさなるしたくさの
ありともみゐぬ今朝のしもかな　羽田三精子

しをれふすすかたもあはれ花すすき
たもせのしもをはらひかねつゝ　梶井久子

夢のころふゆのゝをはなそてやれて
おくしもさむきあさほらけかな　吉田愛子

うちはらふ袖こそなけれかれ尾はな
あさしもしろくおきわたせとも　田中くに子

枯れはてしよもきかやともおく霜に
ふたゝひにほふにはのくさむら　林三津子

あかす見し花のまかきはふゆかれて
ありしいろなきしものしたくさ　彦坂たか子

野へ見れは萩も尾はなもふゆかれて
ふたたひしものはな咲きにけり　小町谷りゐ子

虫の音もかれてさひしきあさ茅生に
しものはなこそさかりなりけれ　太田貞子

きのふ見し千草もいまはいろあせて
しものはなのさなりにけるかな　名取正代子

枯れはてしゆふ野のくさの葉の上に
しものはなのみさきまさりつゝ　保坂いま子

日にそへてかれゆく野への草みれは
けさはつしものはな咲きにけり　久松せい子

いろ〳〵のちくさはかれて冬の野の　久松さく子

はなはひとつのしものしろたへ

秋よりも見わたすかきりさきにけり
のへのかれ生のしものはつはな
野中あさ子

枯れはてし庭の小くさにこのゆふへ
みるもさむけきしものはなかな
三原照子

かれふせるすゝきの上にけさ見えし
はなはおきそふ霜にそありける
久門りえ子

虫の音とともにもゝくさ枯れふして
しものはなこそさかりなりけれ
青木春子

あはれさは誰か見さらん枯れのころ
千くさのうへにおけるあさしも
古市きむ子

うらかれし小くさの上にてるつきの
かけこほるまてしもそおきける
加藤季子

霜けさもいとゝまさりてかれのころ
くさの葉すゑにしものはなさく
河村土子

萩すゝきあきのすかたもうつろひて
しもおき初めし今朝のあはれさ
松井千代子

八千草のはなのさかりもゆめなりや
おいてはしもをいたゝきにけり
松田静枝子

秋されはいろなき野へとおもひしを
なれふすくさにしものはなさく
碓井信子

秋はてゝふゆかれさひしにはのもの
くさはにしものおきそはりつゝ
碓井武子

虫の音も尾はなかすゑも枯れはてゝ
くさ葉ましろにしもそおきける
青柳殿子

かれのころ垣ねのくさにさきにけり
日かけ待つまのしものはつはな
大堀稽子

秋くさのはなのすかたもおいはてゝ
あはれかしらにしもをいたゝく
林久子

朝かほの枯れたるつゝに今朝はまた
ひかけをいとふしものはなさく
廣田とめ子

かれはてし千くさにおける霜みれは
あきのにしきはゆめにさりける
師岡千代子

あかさりしのへの千くさの枯いろを
つくろはせたるけさのしもかな
三笠友子

白たへのしもにかれふす八千くさは
きのふのあきのものとしもなし
島田悦子

みし秋のをはなかそてもしもかれて
のへさひしくもなりにけるかな
岩崎今子

風さむきかれのをみれはひとつらに
白きはしものはなにそありける
鎌形恒子

此ころはひとめもたえてかれをはな
まねかぬそてにしもそおきそふ
鎌形業子

おきわたす霜よりほかのいろもなし
にしきと見えしのへのちくさは
河合文子

ゆきて去し秋をやなほもまねくらむ
をはなかそてにしもはおきても
楢瀬とめ子

まを庭のつまさたのみしはきはらを
ふゆこそしものはなのなりけれ
服部かつみ子

風さむみやかてもかれゝあさちふの
佐藤あさま子

はすゑにむすふしもそつれなき

かれ残るきくさへけさはしをれはて
しもにいろなきにはのおもかな　田津木久子

さま〱のにしきとみねし秋の野の
千くさもしもにかれはてにけり　土肥仙子

おくしものはなの盛りとなりしより
かれこそまされのへのふゆくさ　三浦さき子

まねきにし尾花かそてもなねにけり
しもうちはらふちからなきまて　今井幾久子

身にしむは秋かせとこそおもひしか
しもにおとなきにはのをきはら　澤田たま子

しをれ伏し霜のしとれとなりにけり
きのふにかはるくさのすかたも　大久保みち子

かれ尾花まねかねそてにしろたへの
ゆきと見るまてしもおきにけり　久保田りつ子

にほひにし秋のかたみもなかりけり
かれ葉のくさにしもはさねつゝ　山木はる子

ふゆかれのくさばに霜のおきそひて
なくむしのねぞいとゝさひしき　工藤たか子

あなさひし秋の千くさのいろもなく
しらおきわたすのへの枯れくさ　工藤昌逸子

しもおきて枯れふすのへの草みても
あなさひしやとおもはすやひと　工藤いつ子

しもをおひ枯れにしにはの草見れば
みにしむはかりさむけかりけり　大海原芳子

めてさびしにはのしら萩今朝見れは
あはれはかなくしもそおきける　瀬戸榮子

白たへのしもをかされてむさしのに
たてるもあはれしのゝをすゝき　内田ひこ子

さしまねく尾花かそてにしもおきて
なかめさびしくのはなりにけり　奥原とも子

夜もすから風吹きあれてをれふせる
にはのをきはらしもましろなり　曲澤ひて子

見わたせは野へのちくさも色かへて
しもになひきしふゆけしきかな　財田すゑ子

見めてつるはなのいろ〱冬かれて
おくしもしろきにはのくさむら　薬師寺芳子

十一月二十日 兼題 歌の添削を乞ふ文

天

大坂市北區相生町百六十二番邸　梶井久子

いにし會にはさりがたき事にさまたけられてくちをしうもえまゐらすなりぬされど兼題ばかりはいかてとおもひて例のからくひねり出て侍りしかいつにかはらぬにつきのあしさには我身ながらもあさましうてなんとはいへ大人の御筆もて加へもし削りもしたまひたらんにはなとか枯木にも花のさかさらんやはと折ふしにつけていひいてたるのをもわはせてたてまつるに

なん日ごろうるはしきものをのみ見ろなはしたまふ御目うつしにものしたまはむこよなきさちに侍らんかし

ひろふ人ありとはなしにいろも香も
なきことの葉をかきあつめつる

はつかしのあさや

地

岡山縣岡山市八番町　降田槇子

千草の花もやう／＼移ろひ行きて秋もはや暮近うなり侍るを我したひまゐらする大人にはおしのけの御さはりもあらせられす日々敷島の道たどり給ふとよいともうれしき限にころさておのれもかねてより此道に分け入らはやと思ひ侍りしかは頃日をりにふれて試みに詠み出たれどももとより初學の事とてたゝ三十一文字の數あるのみにて言葉も調はすあまりに拙き事よと我なからあやしう思ひ侍れとさてあるへきにあらねは別の紙に記して御許に送りまゐらするをあやしのわさとゝかめ給はて御いとまのをりよきに筆加へ給ひねかしみつからもてまゐるへきをさりかたき事の侍れはいと／＼無禮なれと人してまゐらすをゆるい給ひてよ何れさふらひて御敎うけたまはるべくなんあなかしこ

人

芝三田四國町二十番地　師岡千代子

一ひの御歌合のおもしろかりしこと今に忘られ侍らすさてそのかしこまりにも參のはらて重ねてとはいと嗚呼かましけれと過つる日母にともなはれて上野の美術展覽會より瀧の川の紅葉をたつね候折からふと心にうかひしよしなしことかきあつめけるかあやしう歌のやうにもあらねはろかまゝに打すておき侍りぬれとかくては初學ひのいとゝさとるへき折もはへらねはかゝやかしさを忍ひて御覽せさせはへり庭の落葉のたゝかきあつめたる言の葉紅葉の色の映あるは一もあるましけれと日頃の御めくみにあまえて願きまつるを御暇もれはせましかはれはすまにまに引きなはさせたまへまつはこのことねかひたてまつりたくてなむあなかしこ

佐々有鄰子

になうしたひまつりて侍ろものから花に啼く鶯を見ゝにつけ水にすむ蛙のこゑをきくたひにうたひ出たろ力なきことのはにほひなき筆のいのち毛を硯の海にふりそそき清書して御もとに奉りぬ紙屋川きよきなかれをくみわけて濁れろふしなく御心のまに／＼調を佳に語格をたゞしたまひてよさゝ文机の御前に入度ふしをかみて願き奉ろにこそあなかしこ

太田貞子

桐の一葉に秋しり初めしもつひ昨日とのみおもひ侍るをいつしかと落葉もふかうつもりて時雨の空のけしき如何御覽し過くさせたまふにか定めて御たしなみの言葉の林におりたち敷島の道のおくかをや究めたまふらんとまつは從はしうなん先つ日歌會の折仰せられし題の歌ども物し侍れどもとより果敢なきおもひよせ心言葉何れも聞ゑぬふし〳〵いと多くまことに御めもじもうら恥かしき限りに侍るをいかゝよきさまにもつくろひたまひてゝ其のほか題外のものどもあまた書き入れ侍りつるを選のいとまいとはせたまはで同じ敷島の道のもと木と御心添しの一はしをおはれませたまへかへす〳〵もねかひまつるになんあなかしこ

保坂いま子

ふりそゝぐ時雨には色もなきを見渡す木々は錦にそめなされ終にもみぢぬ常磐木ばかりみどりをそふるみふゆの空さだめなき此頃は朝夕となく火桶のもと戀しと思はるゝまでになりはべりぬ御許いかゞおはしますらんさはる事なくおはすやとてゆくりなくまうすだにあるを文にてとひまゐらするはいとなめげなる業なれど許させ玉へかしあだし事にてはべらず先つ年より妾が何彼につけつゝ思ひ出し三十一文字をものゝ片端などにしるし置き侍りしがあやしうつもりぬればこたび白き紙に書きつめて御許に乞ひまうしせめては歌らしきものに引直してつれ〳〵なる折のなぐさみ草ともせまほしと思ひ出て斯くこひ白すなりもとよりさる方に心得なき妾の事に侍れば腰のつがひの打放れたる調の整はざるはみながらなるべければ海の原ふかき學ひの鏡にてらしましてたがへるふし〳〵いとつばらにときあかしいましめ玉はらむには妾がこよなき幸にこそやがて詠草はつかひにもたせてさゝげつつばらなることはたいめの折にきこゑあぐべくなむ、あなかしこ

や

松田靜枝子

明日は月並の歌會にて兼題は寄時雨述懐なりとくよりいろ〳〵と考へわたしてうかびし趣向をつらねたく思ひしかども筆は心にまかせずおもはず昨日今日と暮しゝをいよ〳〵明日とせまり徒手にてまゐる事の口惜しく候まゝいそきてよみいてしがたゞ字の數をならべしのみにて人さまに示され申さずあはれ火急の御願に侍れども御加筆をいたゝきたく候はゞいかばかり嬉しからん取いそぎ亂れがきのおたのみ禮なき事はくれ〳〵もおゆるし被下度候かしく

靑木次子

いまだたいめたまはられどたひらかにおはしますとよなにかしの學士とかいづこの教授とかいみじき御つかさ位こそおはさせれどもさう學の道にいたり深くおはしませば御名の高う世にとゞろけるをいみじうしたひ奉りてつれに名つきおくり奉らばやと思ひ候まゝなるに山川遠くへだゝりぬれば御まのあたり教を受け奉らん事もかたくて本意なく月日うちすごしゝをいつまでかくてあらんや文して教を乞はましとてかくは聞ゑさするになんむらいのつみはさりとこゝろなく侍れどゆるしたまひて御數子の末に加へさせ給はばこよなき幸にてこそかしこ

梅崎はつ子

秋深くなるまゝに四方の紅葉も色づきて見渡すかぎりは野も山も錦ならぬはなく夜毎〳〵の虫の聲さてはきぬたさへ聞ゑぬればたゞにやはとて此頃の月明にことよせ去る夕方より歌會を催しぬ久し振りの事なれば尊大人に御批評を願はまほうし侍ればよき傳手をかたらひ送り申しぬふ參のつみもとひ玉はで御用少なの折々に御添削なし玉はば有が

たき仕合になんあなかしこ

楠瀬さめ子

さらぬたに秋はかなしき物をまして今年は白露さ共にはかなくなりしたらちねのありし事のみしのばれて堪へがたき心地し侍り虫の音にくる〻くれはさらにもいはずくまなき月をみるにつけてもおのかかげをは母かさおもひあゝはたらちねの手つから植ゑにし白菊の時をたかへす朝露に咲匂ひたるを み佛に手向くるなど のをりふし 心そ〻ろ浮ひたる事さもかたなりなる心やりにかきつけおきつるを亡きみ靈の前にさゝけん物さおほゝ侍れはいかてたらはぬ心を補ひて御言の葉を添もし削りもし給はゞ姿の幸のみか なき母もいかになくさみ候はんかしあなかしこ

佐藤あさま子

敷島の道は大和言の葉の花なれば 一わたり心得おかずしてやはさ思ひ立ち同じ心なる人打寄りて近頃一の歌會を始め候 ひぬさて此道に名ある人は就きて難波江のよしあしをわかちさては赤き點 をも加へ玉はらんさ人撰みしけれども田舎にはさるべき人も侍らず 都なる人に乞はゞやさ思ひしもの〻某の大人は古になずみて高きに流れ某の大人は今めきたれども俗に陷り其の大人は何くな ど曰ひ出れば定めなく先生こそ此道の古今のよろしきを得て且は昔よ りのゆかりも侍ることなれば然るべからんさいひ定まりた れば先づ御心を伺ひ參らするになむ都にあるものならば御許に 參りて左右の御返りごと伺ひ奉るへきなれども隔りたる身のはなら ぬことのかなしさよあはれ田舎人のゐやにならはぬをばさがめ 玉はで殘からぬ心の底を酌み取り玉はらんことをねがひ奉るあなかしこ

眞鍋直子

こたひ親しき人の父君の八十になりますよろこひの祝ひ歌をさ例の人〻にもよませ妾にも一うたよめさの事に侍れさも 知しめす通りいさうひ〳〵しく拙き道なれはいなみの〻度々いなみ侍りしもせちにはたりて許され侍られは本末もうちそろはぬ恐かうた二三首よみこ〻ろみ侍れさもいつもかはらぬ事にておもなくは侍るものから御筆加へさせ玉はらは何事かこれにまさることの侍らんさひたすられき奉るになんあなかしこ

大久保みち子

此日頃の錦織なすてふ紅葉を如何に眺めさせ給ふらん妾 事いにし日友だちのひき合せにて彼の歌學會さやらに加入致し候ひ しに、此の月の末つかた年々の例にて催さる〻秋季歌會に 出しぬべき歌よべやう〳〵考へものし侍りながら初々しき拙きもの〻さる會に 出しぬべうも侍らずはさ〳〵なやみ侍り君は早くより斯道にいさ 妙へに渡らせられて人〻にも數へさせ給ふさの事ふさ心付きたれはいさ〳〵うれしうて縁るの厚き御思召に甘ゝて御ねかひ申し上るを いかで〳〵御筆入させ給ひなんにはうれしさは如何ばかりに侍らんかしこ

今井幾久子

障る事のありてゝ諂うてすいさもなめけなれさも筆 をたつきに乞ひ奉るさても歌は力をもいれすして天地を動すさいふ御國ふりなるに國人さしてよみ得ぬは物學ひせし甲斐もなかるべしわきて事ことにあはれの心深き女にして此道を知らさらんには朝の かすみ夕の脳にも何によりて思をやらんごするせん方なきのあまり果てはあやしき道 或は卑しき力に走る外なくいさ口惜しかるべし又心に思ふ事見る物聞く 物につけていひ出るか歌なりさはいひ調べのさ〻のはさるも亦口 をしさればなれも御國に生れし女らしく今よりより〳〵にはやさしくまねひ 出て

てんやと父よりれもころなる教訓を承りていさ面なく侍りされと常に鳥をあはれみ露をかなしむ心なからんや只才短かくして言の葉に出さりしのみ今よりはおろかなる心をもはげまして猛き武士の心を慰るはかりには行かずとも責めては父の口惜しき節を癒さんと思出しに師とたのみまゐらするは御渡りの外なしあはれ心の程もおしはかり給ひて別紙詠草はいともつゝましき片言のみなれと只あはれと見そなはして御筆添へさせ給ひてよあなかしこ

ほと遠き花の山口心あてに
　いさふみそめんしき島の道　　山木はる子

年頃何事かおはしまずらん世はなれたるこの山里のならはしとてなこたりの頭ゆるさせたまへげにつれ〳〵なるまゝに春秋の花紅葉さては雪のふりたる朝郭公のなのりたる夕などのごけく淋しきをり〳〵につけからくものせる腰折ども御らんに入れ侍りむげに深山邊のことの葉にしあればこちたくれぢけさとひたるも多からむいかで都邊の花をにほはしめたまはらはいかにうれしく楽しからむとおもふまゝに一向れき奉るあなかしこ

紅葉深　　諏訪晴子
いろふかく夜の間の雨やそめつらん
　たつたのやまのみれのもみぢは

雨中鷺　　仝
降る雨にぬれつゝたてるしらさぎは
　みの毛ほすまもあらしとそ思ふ

川霧　　河野文子
ことかよふ舟のかけさへみえぬまは
　されのかはつらきりたちわたる

折にふれて　　津田德子
たらちれの在しむかしのしのはれて
　たゝなみたよりほかなかりけり

月夜故郷を思ふ　　仝
山かはをとほくへたてしふるさとも
　おなしこよひのつきや澄むらむ

朝落葉　　村田貞子
あさからすれくらはなるゝ羽風より
　こすゑの木のはみたれてそちる

網代　　町田鶴子
ふる雪にあしろもろみやいかならん
　よりくる氷魚をみるもさむけし

千鳥　　大島愛子
かはらやく今戸のけふりすゑきえて
　あかつきさむくちさりなくなり

菊　　中澤しづ尾子

うるはしく咲きにほへる花を見てはたれかめでざるものあらんされと大かたの人はたゞ花のさまあてやかに色香めでたきをのみもてはやすめれとこゝろあらん人はたゞに色香をよろこぶのみにはあらで清きみさをのある木草をめづるなるへし

花といふはな多かるなかに人の目をもよろこばしめ心をもたのしましむるのみならて清き操あるは梅をおきては菊にしくものはあらし

千草の花はうらかれてあたり淋しき庭の風情なるにうるはしう咲きいでたる菊の露ににほひ霜なしのくみさなあはれその色香その操たぐひやはあるしたたる露に千歳のよはひなのぶるなどめでたきものにいひはやし世に花の君子さもてはやすもけにさることゝこそ覺ゆれ

わか物學ひする文屋の庭に菊のかぎり植ゑたる前栽あり園丁の朝に夕に心なこめてそたてしかひありて今年は例よりも花大きく色香も殊にめてたく咲きいてたりわきて白菊の匂ひたかく花も大きやかに咲きいてたるかきりなくめつらかなれは朝には庭におりたちてめて夕にはかめにさしてあかす向ふ友さなしぬ

世にはこなおほしたてゝほこりかほする人の露霜にあてしさあかりさうしておほひいさものくしくしつくろひたる中々に心つきなしわきて花もて人のすかたあるはけたものゝかたちなさ作りたるは花のみさなも打たれ見るめもあさましく覺はぬかし

仝　　津和崎こう子

夕の霧は時雨の雲に立ちかはり朝の露は草葉の霜におきかへて前栽の千くさの花も虫の音もあはれかれくなるに一年の花のさちめさ朝かほの只つかのま時めきたりしまかきのもさに今は菊の花千世なしめて開き出てぬることそ又なくめてたけれ花は大きなるあり小きありたけたちの高きありひきゝあり色もうすくこく種々に匂へるなさいさ見さころありてなんまいてかなりのけたかくなつかしきに露に霜にたへて久しく榮ゆれは長き世のためしにひかれ變らぬなみなのみさなになぞらへらるゝは他にたぐふへきものもあらすなん

秋ふけて枯れゆく野へに咲き匂ふ
きくはみさなの花にこにありげる

●きこえまゐらす

一原稿はすべて、書きざま正しかるべし、文字のみだれたる、住所姓名のもれたるはとらず。

一兼題歌文は、ことに變体がなを用ひす、一字々々分明にしるさるべきこと、又歌一首の上に、上の句の中に二ところの漢字一字を用ひ他はみなかなを用ゐるべし。

一必半紙を用ひて十六行、二十四字詰なるべきこと。

一毎紙、國郡、町村、番地、姓名等つゞらかにしるさるべきこと。

一五日兼題は前月廿五日二十日のは、その月の十日までに本社にとゞくやう御出しのこと、遲れたるはとらず。

夜の物は云ふも更なり。壁落ち屋根破れて、風雨をもらせど、聊寒しともつらしとも思はず。實に人の身は、習慣によりて、如何樣にもなるものなりとなり。

習慣は、第二の天性とも云へど、尤大切なるものなり。故に人は成るべく、よき習慣をつくる樣にすべきなり。人の性は善なれども、習慣によりては、惡となり、奸となり、佞となり、邪となる。小兒を養育するにも、風にも日にもあてゝ、成るべく衣服を薄くし、食物を其の心に從ひて食せしむる時は、病氣もなく健に成長すべけれど、之に反する時は、聊にても風日にあたれば、忽病を得、少しにても寒飢を覺ゆれば、直に體を害ふ。是其の習慣の然らしむる所なり、又平生の習慣、武勇なれば勇武にすぐれ、沈着なれば何事にも驚かず、忍耐の習慣あれば、艱難辛苦にあひても屈撓することなく、勤勉になるれば惰怠なることを能はず。之に反して、億病柔弱輕騷遊惰の習慣になる時は、終身之を離るゝことを能はざるものなり。學者といへども、始より學者なるにあらず。聖賢といへども、生れて直に聖賢なるにあらず。皆其の習慣、第二の天性となりたるものなり。又奸邪佞惡も、生來奸邪佞惡なるに非ず。是亦其の習慣の然らしむる所なり。されば其の習慣は、

實に一身の吉凶禍福、是非善惡の分る丶所なれど、尤も愼まざるべからざるなり。すべて世の中は、飛鳥川の淵瀨の如く、變遷するものなれど、人も亦其につれて變遷せざる事なきを得ず。即榮枯盛衰、有爲轉變、測るべからざるなり。富貴も忽貧賤となり、貧賤も亦富貴となる。其の富貴なる時に、貧賤の習慣をつけ、貧賤なるもの丶、富貴となりたる時に、之を忘れざる樣にすべきなり。樂を樂しむことは易きことなれども、苦を苦しむことは甚難し。人倫の道を破り、道德の義を棄つるが如きは、大方此の苦に堪へざるより起る。苟も、苦に堪ふる習慣、其の性となりたらんには、如何なる事も堪へ能はざることあらむ。人の身は皆ならはしのものなれど、其のならはしを違へざる樣に心がくべきなり。

多々良政弘

ひとへなる人もぞあると世をしればうすき衾もさらぬよはかな

衾とは、夜具の事なり○一首の意は、夜寢ねても、夜具の薄くして、寒さ身にしみわたり、いもねられぬ樣にあれども、亦よく〳〵考ふる時は、世の中には我より貧しき者あり。此の如き寒き夜にも、唯一重なる夜具などを着て寢る人もある

事よと、世の中おしなべての人の身の上を考へて、其の有樣を知る時は、假令我が着て居る夜具は薄くありとも、其の一重のものに比すれば、餘程立ちまされり。斯樣に思ひなす時は、薄き夜具も寒しとは思はずとなり。

何事も、我が身より上を見て羨み望むべからず。我が身より下を見る時は、實に我が身の幸福なるを知るべし。人の富貴は、天命にあるものなれば、如何に望むとも、求めがたし。如何に羨むとも得がたし。唯我が身の分を知りて、學問を勉め職業を勵み、孜々として怠らず、世に勝れたる人となる時は、天決して之を捨てず。自求めざるも、幸福はおのづから來る。又如何に富貴は天命にありとも、勉勵せざれば、天之を與へざるのみにあらず、返りて禍を降すに至る天命は實に人の行爲如何にあるのみ。故に其の命を得んと欲せば、勉勵して善事を行ふに如かず。唯己より勝れたる人を羨み、己の及ばざる事をのみ望み願ひて、勉め勵むことなからんには、などか天命を得ることあらむ。己より劣れるものを憐み、己の過ぎたる事を省み、其の分に安んじて勉め勵みなば、などか其の命の新ならざることなからむ。人は唯己が着たる薄き衾は寒くとも、一重なる人の身の上を思ひ

やらば、實に世に不足に思ふ心は出でざるべし。不足の心なければ、不平の心なし。不平の心なければ、心常に快樂なり。心快樂なる時は、愛憐の情おのづから起こり、善を施し德を布くに至る。是自幸福を求むる所以なり。

讀人知らず

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことの葉うれしからまし

一首の意は、此の世の中の人が、皆僞を云はず詐をせぬ世の中にてありしならば、人の云ふこと〴〵、皆信じて疑ふに及ばぬ故、いかに人の言葉が嬉しくあるならむ。されども詐僞の多き世の中なれば、少しも人の言を信ずる事出來ず、無益の事に心を勞して苦しむとなり。

此の歌の意の如く、世の中に詐僞と云ふことなからんには、如何に嬉しき事ならむ。然れども世の開け行くに隨ひて、人心澆季になるものなれは、容易に詐僞なき世の中とはなりがたかるべし。まして當今は、西洋の風俗浸漸し、我が國固有の禮儀廉耻を一掃せんとする時節なれば、尤注意せざるべからず。早く此の惡しき風俗を矯正する事なからんには、千萬世の末に至らば、如何なる世の中となり

やはつらむ。實に慨しきことなれど、人々務めて此の風俗を古にかへさんことに、力を盡くすべし。之を矯正するには、法制を以て制裁することを得ざるものなれど、道徳を以て責めざるべからず。道徳を以て責むるには、如何にせば宜しきか。唯人々道徳を守りて、之に違はざる様にするより外はなきなり。苟も人々道徳を守り、不義を行はず、無道をなさず、正道純善なる人とならんには、詐僞するもののなきに至ること明なり。若此の如くなりたらんには、實に神仙の域に遊べる心地して、壽命もおのづから長きに至らむ。世の中の人々よ、如何に願はしき事ならずや。

後京極攝政太政大臣良經

世の中に虎狼は何ならず人の口こそ猶まさりけれ

一首の意は、虎狼は口を以て人を噬み殺す猛獸なれど、隨分恐しきものなり、然れども、虎狼の如きは、之を避くるに術ありて、逃れ難きものにはあらざれども、人の口は實に恐ろしく、我が知らざる間に、如何なる禍を云ひかけ、如何なる難を吐きかけんも計りがたし。さる時は遁れんと欲しても遁れがたく、實に虎狼よ

りも、世の中に恐ろしきものは、人の口ぞとなり。
古より忠臣賢士の、奸邪佞悪の徒の爲に讒言せられ、或は流罪、或は斬罪に處せられたるもの多し。實に虎狼の口よりも恐ろしきものは、人の口にぞありける。然れどもさる奸悪なるものは、一時勢力を恣にする事は得とも、後には必自も其の罪に陷り、終を全うするものなし。弓削道鏡、藤原時平などの如き、皆然り。故に口は啻に人を害ふものなるのみならず、みづから我が身をも害ふものなり。古人の、口は是禍の門、舌は是禍の根と云へるも、實に宜なり。故に人は、尤も口を愼むべし。別けて女子は、男子よりも詞多くして、無益の事を云ふものなれど、其の中におのづから云ふべからざる事も云ふに至るものなり。よく／＼注意すべし。

香川景樹

唐土の虎ふす野べに吹く風の目に見ぬところ恐ろしの世や

唐土の虎ふす野べに吹く風のは、目に見ぬところと云はん爲の序詞なり。其は支那の虎の伏す野に吹く風は、我が國の人の目には見えぬものなれどなり。○一首

の意は、人の目に見ゆる限りは、各々其の用心をして居れば、禍を防ぎ、難を避くる術も施すことを得れども、目に見ぬ所にて、人の奸謀悪計を施し、己を陷れんとするも、知る事能はざるものなれば之を遁避するに難し。故に目に見ぬ所が、世の中はおそろしきとなり。

人は、目に見ゆる所に於いて、禍難の來らむとする時には、之を防ぎ、之を避くる事を得れども、目に見えず知らざる時は、如何にすとも、之を避くること能はず。故に己が目に見ぬ所に、尤注意すべし。然りと雖も、如何に注意しても、陰謀に至りては、之を發見する事能はざるなり。然らば如何にすれば、宜しきかと云ふに、唯己を愼むにあり。己さへ正直にしてたがふ處なくば、人如何に之を陷擠せむと欲するも、得べからざるなり。故に君子には獨を愼むと云へり。人の前、又は外面上にては、誰も謹愼するものなれども、人の見ぬ所、又は裏面内にては、謹愼せぬもの往々あり。さる人は、いづれの時か禍害を招くことあるべし。何となれば、己より出でたるものは、己に歸る道理にて、免るべからざるものなればなり。天のなせる禍は、猶免るべし。自なせる禍は、免るべからず。されば人は

正直にして、道德を行ひ、彛倫を違へざらば、目に見ぬ所も恐るゝに足らざるべし。

讀人知らず

なき名ぞと人には云ひてありぬべし心のとはゞいかゞこたへむ

一首の意は、我が不名譽の世に聞えしは、決して眞實に、さる不名譽を蒙るべき事を行ひて、受けしものにあらず。實に寃罪を蒙りしなり。故に我が蒙りし不名譽は、實際なき所の名なりと、他の人には云ひてある事も出來るならん。されど我が心が、果してなき名なるかと問ひしならんには、如何に答へ得べきか。若し實際不名譽を負ふべき事のありしならば、我が心は欺くべからず。必實際に答ふるならむ。されば心に答ふるごとく、人にも隱慝する樣の事なく、實際を云ふべきなり。心と口とは、決して異にすべからずとなり。

人は、天性善良なるものなれど、如何に姦惡に變じたりとも、其の善良なる天性は、存するものなり。假令ば、鏡は曇りても、其の明は内に存するが如し。故に奸惡なる人の、奸惡なる事を行ひて、自快とし面白しとするものはあらず。假令

一時利欲の雲に蔽はれて、奸惡を快とし面白しと思はんも、後日に至り、又は心靜かなる時などには、不快に感ずべきことと明なり。其の故は、其の行ひたる事を、公然、人に語らず、之を包藏隱蔽して、唯顯はれざらむことを務むるにて知るべきなり。又如何に無慈悲なる人にても、人の難儀を見る時は、直に愛憐の心を生ず。是天性の善良なるものゝ、内に存する處あるを見るべきなり。故に、此の善良なる天性は、恰も陰雲の中より、時々日光の明を放つ如く、事にふれ時にあひて發現す。殊に奸惡なる事を行ひし時には、猶甚しくあらはる。故に、我みずから惡事を行ひて、不名譽を蒙りたる時、寃罪など、人には云ひて瞞着することを得れども、其の良心があらはれて問ひたらむには、如何なる人にても、なき名ぞとは答へ得ぬなるべし。されど人は、如何なる時に、良心が發して詰問する事あるも、之に答へえぬ樣なる事は、決して行ふまじきなり。又云ふべからず。唯已の良心にさへ耻づる事なからむには、實に善良なる天性を、全くする人と云ふべきなり。

皇太后宮大夫俊成

ますらをにしかまつ事のあればこそ嘆もたへしのぶらめ

一首の意は、大丈夫の何事にも忍耐して、屈撓する事のなきは、忍耐せし丈のものを、後に期し待つことのある故に、茂き嘆もたへしのびて、屈撓せざるならんとなり。

人に忍耐の心なかるべからざる事は、前に已に述べたるが如くなれども、人の忍耐する所以の者は、此の歌の如く、後日に至りて、期し待つことのあるを以てなり。後日に期し待つ事のなからむには、如何に忍耐すとも、何の功かあらむ。否後に期することなくして、忍耐するは、真の忍耐にはあらで、怯懦なるものなり。故に忍耐も、時と事とによるなり。君恥かしめられ、父辱を蒙るを見て、臣子たるもの、之を忍耐する事を得むや。若之を見て、其の恥辱を雪ぐ事なからんには、是則懦夫なり。億病にして其の事を行ふ能はざるなり。此の如きは、大丈夫の取らざる所なるのみならす。大に卑む所なり。されど、忍耐は如何なる事も、如何なる時も、必せざるべからすと云ふにはあらずして、しか待つ事のある時にすべきものなり。此の差別を能く考へて、之を誤らざる様にせざるべからす。

阿闍梨契沖

あしびきの山をぬくてふたちからも身には思はず心にもがな

あしびきのは、山の枕詞なり。○たちからは、手力なり。○一首の意は、彼の支那の項羽は、山を拔く力ありと云ひしが、我は其の手の力を身にはほしとは思はず。身體の力は、左程強くなくともよけれど、心にはほしきものなり。心に山を拔く如き力を持ちたらむには、如何なる事變にあひ、如何なる艱難にあふとも、盤石の動かぬが如く、巍然として騒ぐ事なく、事物の處置をも誤らざるべし。されど項羽の、山を拔く樣なる強き力を、心に欲しきものよとなり。

手足の力は、如何に強くとも、手足の及ぶ限の外には及ばす事能はず。其の益する所知るべきなり。而して手足の力は、卑夫の勇なり。心の力を以て、之を施す時は、其の及ぶ處際限を知らず。是上士の勇なり。卑夫の勇には敵するものあれども、上士の勇には敵するものなし。彼の支那の項羽は、力山を拔くと歌ひし程の勇者なれど、百戰百勝、未曾つて敗北したる事なかりき。然れども是卑夫の勇なりしかど、最終の戰に於いて、高祖の爲に打ち破られ、遂に討死したり。高祖

は山を拔く力を心に持ちしかど、常に項羽の爲に敗北のみしたりしかど、遂には之を打破りて、天下を取りたり。是上士の勇なればなり。上士の勇は、人の上に立ち、卑夫の勇は、人の下に立つ、上に立つものは人を使ひ、下に立つものは人に使はる。されど人は手足の力はなくとも、心には山を拔くほどの力を持たまほしきものなり。

加茂眞淵

飛驒たくみほめて造れる眞木柱立てし心は動かざらまし

飛驒たくみとは、飛驒の大工なり。昔は飛驒より上手の大工出でし故、殊にとりいでゝかく云へり。○眞木柱のこと上に云へり。此の下に、の如くと云ふ三字を加へて見るべし。飛驒たくみより眞木柱までは、下の句を云はん爲の序詞なれど、歌の意は下の句のみにあり。○一首の意は、飛驒の國の大工は、餘程上手なれど、其が賞め稱へて造れる眞木柱は、決して動く事なし。其の眞木柱の動かざるが如く、我が立てし心ざしは、如何なる艱難辛苦にあふとも、決して動かす樣の事はあるまじ。必其の立てし志を通さずしては置かずとなり。

日用百科全書

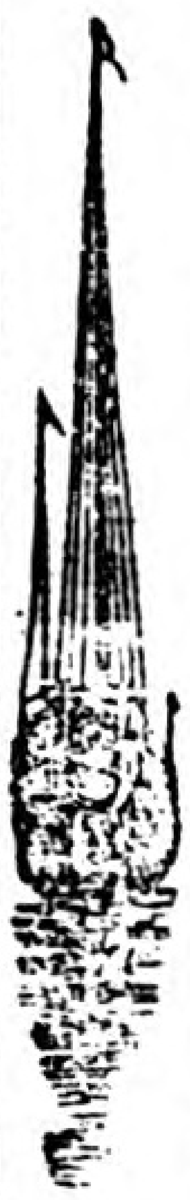
從三位子爵　前田利嗣君題辭　十一月
從四位子爵　本多忠貫君題詠　二十日
清浴女史　吉田調子君序文　發行

第七編

裁縫と編物

全壹冊美裝　正價金廿錢　郵税六錢
極彩色口繪梶田半古畫●寫眞銅版並
井木版密畫百數十個挿入

女子の尊き天職は、母として子女を育成し、妻として一家を齊整するを主とす。特に家族の衣服類は、一として子女の手に繫らざるなく、裁縫及び編物は、實に女子として、尊卑に論なく、最も必要の手藝たり。本書に於て懇切鄭寧に其順序方法を解明し、一讀其術に精通すべからしむ、他の慰み物に精しくとも、裁縫に迂きは婦人の耻なるを辨へ玉ふ方は、速に此書を讀み玉ふべし。



日用百科全書目次

◉第十三編より以下の目次は追て廣告すべし
毎月壹回發兌美裝一冊菊版二百五十餘頁

正價　●壹冊金貳拾錢●六冊前金壹圓拾五錢●十二冊前金貳圓貳拾錢●郵税壹冊ニ付六錢宛

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館



美術
寫眞
善良にして妙趣を存し一種の光澤を帶ぶ
神田區駿河臺
玉華館
氣賀秋畝

細川十洲翁序　三輪田眞佐子著

女子の本分　全

●定價金二十五錢●郵稅金四錢●郵券代用一割增

三版

近者、我邦女子道德の頽敗に赴くこと、日また一日より甚し。三輪田刀自、之に慨する處あり。本邦固有の道德に基きて、此の書を著し、以て我が邦の婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや、忽にして、再版を賣盡し、今や三版の成るを告ぐ。請ふ。續々御注文あらんことを。

目錄

發行所　國光社
東京京橋區築地二丁目二十一番地
（電話一九四六）

女鑑第九十七號目錄

〔明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すへし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年十一月十九日印刷
同　年十一月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)